



故陸軍少將子爵朽木綱貞

敍勳ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク
昭和四年九月十日

内閣總理大臣濱口雄幸



内

閣

498

陸軍第四二

昭和四年九月九日

昭和四年九月十日

内閣總理大臣 陸

賞勳局總裁



故陸軍少將正三位勲三等子爵朽木綱
貞儀ハ大正三年八月陸軍火藥研究所
長ト爲リ我國ニ於ケル火藥爆藥ノ最
高權威者トシテ之カ研究改良ニ精進シ
又率先科學研究機關ノ緊要ナルコ
トヲ提唱シ日夜奮勵努力シ遂ニ大正
八年陸軍火藥研究所ヲ廢シテ陸軍科

賞勳局

學研究所ヲ創設セラレ現時陸軍科
學研究所カ幾多ノ世界的發明ヲ完
成スルニ至リタルハ先覺者タル同人ニ倚ル
所多シ同人ノ考案ニ成ルモノノ中無煙藥
ノ制式安定劑トシテ現制ノD劑ヲ採用
シ新式火藥ヲ創製シタルカ如キハ其ノ最
モ苦心研鑽セル所タリ又毒瓦斯タル塩素
瓦斯ヲ研究シテ軍用毒瓦斯ヲ創造セ
ル等功績顯著ノ者ニ候處本月六日死
去セル趣ニ付此際持ニ同日附ヲ以テ勲二

等ニ叙シ瑞寶章ヲ授ケラレ度此段允
裁ヲ仰ク

内

閣

裏面白紙

故陸軍少將正三位勲三等子爵 朽木 綱 貞
右者別紙功績書之通其功績顯著ナリシ處
九月六日死ス仍テ特別ノ御思召シニ依リ死
亡日附ヲ以テ勲二等ニ叙レ瑞寶章ヲ授ケラ
レ度
謹テ奏ス

昭和四年九月六日

陸軍大臣宇垣一成



陸軍

功績書

後備役陸軍少將 三位勲三等子爵 朽木綱貞

右者大正二年一月陸軍火藥研究所御用拭ヲ被命次同三年八月陸軍火藥研究所長トシテ奉職シ我カ國ニ於ケル火藥爆藥最
 高權威者トシテ之カ研究改良ニ精進シ以テ爾後ノ戦役ニ偉大ノ効果ヲ奏
 シ功績顯著ナルモアリ又少將ハ科學ノ著大ナル進歩ト歐洲大戰ノ經
 験ニ鑑ミ次ノ戦争ハ必ず科學戰ナル事ヲ洞察達觀シ率先シテ我
 國ニ其ノ研究機關設立ノ緊要ナル事ヲ提唱シ之カ實現ニ関シ或ハ
 意見書ヲ發表シ或ハ關係要路者ヲ歴訪シテ之レカ説得シ努ムル等
 日夜奮闘努力シ遂ニ大正八年陸軍火藥研究所ヲ廢シテ陸軍科
 學研究所ヲ創設セラレ同所ヲシテ從來ノ火藥研究ノ外一般理化學ノ
 研究機關タラシメ又大正十二年ニ當時陸軍省ニ在リタル臨時毒瓦斯
 斯調查委員ノ研究ニ屬セン毒瓦斯ノ研究ヲ當所ニ併合シ現時ノ

陸軍

陸軍科學研究所ノ完成シ以テ我國現代ノ化學兵器ノ進歩發達ニ
 貢獻セリ之レヨリ先キ少將ハ又毒瓦斯研究委員トシテ之レカ製造ニ
 從事シ大正七年四月神奈川縣程ヶ谷曹達工場ニ於ケル塩素瓦斯
 製造作業中熱心研究ノ餘リ暈ニ之レカ害毒ノ爲メ咽喉及氣管
 支ヲ侵サレシカ意トスルコトナク益々之カ研究ニ精進シ以テ我國ニ於ケル
 毒瓦斯進歩發達ノ端緒ヲ作り現時陸軍科學研究所カ筈多ク
 在界ノ發明ヲ完成シ東西ニ其ノ雄ヲ誇リ得ルニ至リシハ實ニ先覺者
 タル少將ノ不斷ナル熱心絶倫ナル精力深厚ナル學識トニ倚ルモノ定ニ
 多ク其ノ功績顯著ナリ。

尚昭和三年十月六日貴族院議員ニ當選シ爾來國家ノ枢機ニ參
 與シ功績アリ

朽木少將功績書追加

一、火藥 爆藥ニ関スル事項

1. 大正三年六月無煙藥、制式安定劑トシテ現劑ノD劑ヲ採用シ新式火藥ヲ創製ス

2. 各種無煙藥、安定度検査法ヲ考案シ從來本検査、不備・基ク火藥、自然爆發或ハ不慮ノ危害ヲ防止シ得ルニ至レリ

3. 大正十年九月十四日、戦時火藥製法造要領及検査假格例(現行)大正九年二月九日、彈藥取扱細則(現行)、作製ス

4. 我國ニ於ケル火藥資源、貧弱ナル。鑑ニ戦時代用爆藥トシテ硝子藥、硝那藥、塩子藥、塩那藥、塩指藥

陸軍

若臣藥、創製ス

5. 近代化學戦、必要ナル發煙劑、製法完成

二、毒瓦斯ニ関スル事項

毒瓦斯タル塩素瓦斯ヲ研究シ軍用毒瓦斯ヲ創製ス

履歷書

族稱 東京府華族

現住所 東京市麹町区中六番町十九番地

陸軍少將 三位 勳三等 工學博士 子爵 朽木 經貞

明治八年二月二日生

明治八年三月十日 叙從五位

同三十年一月十五日 任陸軍砲兵少尉 同日東京湾要塞砲兵聯隊附

同 年六月十日 要塞砲兵射擊學校生徒隊附心得被仰付

同三十一年十月一日 東京湾要塞砲兵聯隊附

同三十三年十月七日 任陸軍砲兵中尉

同三十三年十月十日 叙正五位

同 年十二月十六日 東京湾要塞砲兵聯隊中隊長心得被仰付

同 年三月十六日 砲工學校高等科卒業 同日員外學生

陸軍

明治三十四年一月九日 東京湾要塞砲兵聯隊附

同 年九月十日 東京帝國大學工科大學子應用化學(入學)

同三十五年十月十五日 任陸軍砲兵大尉 同日東京湾要塞砲兵聯隊中隊長

同三十七年五月二日 大阪砲兵工廠製造所員

同 年六月十八日 同日三月廿五日 同三十八年十月十六日 明治廿七年戰役勤務ニ從事ス

同 年七月十日 東京帝國大學工科大學子應用化學科課程卒業

同三十九年三月三日 東京砲兵工廠附

同 年四月一日 叙勳五等授雙光旭日章

同 年七月三日 東京帝國大學大學子院入學

同四十年三月三日 叙從四位

同四十年十月十三日 任陸軍砲兵少佐

同四十二年二月一日 東京砲兵工廠員

同四十二年二月八日 陸軍兵器本廠附兼陸軍兵器本廠検査官被仰付

大正四、一
九一〇、
八一五、
大正七、
大正八、
昭和五、一
昭和四、九

履書

東京府華族

東京市麹町区中六番町十九番地

少將從三位勳三等工學博士子爵朽木綱貞

明治六年二月二日生

五位

砲兵少尉同日東京湾要塞砲兵聯隊附

砲兵射擊學校生徒隊附心得被仰付

要塞砲兵聯隊附

砲兵中尉

五位

要塞砲兵聯隊中隊長心得被仰付

學校高等科卒業同日員外學生

陸軍

要塞砲兵聯隊附

國大學工科大學子應用化學入學

砲兵大尉同日東京湾要塞砲兵聯隊中隊長

砲兵工廠製造所員

明治五年十月十六日明治廿七年戰役勤務ニ從事ス

國大學工科大學子應用化學科程卒業

砲兵工廠附

寺校雙光旭日章

國大學子大學子院入學

四位

砲兵少佐

砲兵工廠員

香取廠附陸軍音樂本廠檢查官被仰付

年數計算

大正四、二、七	瑞三	委任	五年四月	勳	二年八月
大正一、〇、三	二〇	勳	二年十月	勳	二年十月
大正一、三、六	四	勳	二年十月	勳	二年十月
大正七、八、二	由地勤務表	一等	勳	勳	勳
大正八、四、一	五	勳	勳	勳	勳
昭和五、〇、六	勳	勳	勳	勳	勳
昭和四、九、六	勳	勳	勳	勳	勳

合計

六年七月

同 年二月五日 政洲へ被差遣

大正元年七月十日 陸軍兵器本廠検査官兼勤被免

同 二年三月十八日 東京帝國大學工科大学講師ヲ囑託ス

同 年一月十五日 任陸軍砲兵中佐

同 年一月十七日 陸軍火薬研究所御用技兼勤ヲ命ス

同 年二月一日 陸軍砲工学校教官

同 年七月十八日 叙勲四等授瑞寶章

同 年十月十七日 叙正四位

同 三年八月十日 陸軍火薬研究所長

同 年八月十五日 陸軍技術審査部議員

同 四年四月三日 佛國へ出張被仰付

同 年七月七日 叙勲三等授瑞寶章

同 五年七月十日 任陸軍砲兵大佐

陸 軍

大正七年五月八日 臨時毒瓦斯調査委員

同 八年四月十五日 陸軍科學研究所第二課長

同 年六月十八日 工學博士ノ學位ヲ授ク

同 年八月十四日 爆發ニ関スル研究事項ヲ囑託ス

同 九年三月十八日 陸軍技術會議員被仰付

同 年七月一日 旭日中綬章加授

同 十年三月十日 任陸軍少將

同 十一年一月十日 叙従三位

同 十一年八月六日 陸軍造兵廠火工廠長

同 十三年二月四日 侍命被仰付

同 年二月二十六日 豫備役被仰付

昭和三年十月六日 貴族院議員ニ當選

内閣 陸軍第四二号

叙勲、件進達

昭和四年九月六日

陸軍大臣 宇垣 一



内閣總理大臣 濱口 雄幸 殿

陸軍少將子爵 朽木 綱貞 叙勲、件
右進達 不

328



裏面白紙

陸軍

言正用

特

大正七年四月三十日

陸軍省
陸軍部
陸軍大臣
陸軍少将
陸軍中佐
陸軍少佐
陸軍大尉
陸軍中尉
陸軍少尉
陸軍少将
陸軍中佐
陸軍少佐
陸軍大尉
陸軍中尉
陸軍少尉

軍事化學(火藥爆藥)研究ニ關スル意見書

陸軍砲兵大佐 朽木綱貞

329

めくれず

裏面白紙

總

説

裏
面
白
紙

大正七年四月三十日

陸軍砲兵大佐 朽木綱貞

總 說

歐洲戰役ノ發展ニ伴ヒ交戦各國各自ニ其軍需品製造ニ關スル工業ノ統括ニ勤メ其統一ヲ謀ルト同時ニ工業技術ノ進歩ニ關シテハ輿論ノ向フ所ニ從ヒ秩序的綜合的研究法ヲ採リ競フテ之カ研究設備ヲ設ケ多ク有識ノ士ヲ集メテ學理ノ實地的應用ニ努力シ漸次其效果ヲ收メツ、アルハ世ノ汎ク知ル所ナリ而シテ戰前此種ノ研究法ニヨリ既ニ工業界ニ幾多ノ効果ヲ收メ特ニ火藥製造ヲ含ム化學工業ニ於テ關稅政策ノ

扶助ヲ受ケズシラ世界ノ斯界ニ雄飛シ獨歩ノ域ニ達シアリシハ彼ノ獨斷ニシテ其研究法効果カ顯著ナリシ狀況ノ大要ハ嘗テ大正九年十一月菅ノ同國駐在勤務ヲ終ルニ際シ各種統計上ノ數量ヲ基礎トシ其他見聞セル事項ヲ綜合シテ報告セルカ如シ今因命ヲ奉ジテ更ニ英佛ニ出張シ斯界ヲ見聞スルニ及テ此間ノ消息益々具故アルヲ確認セシメタリ蓋シ此等各國斯界ノ輿論ト斯界ノ設備カ此種研究方針ヲ是認實行シツ、アルヲ認メタレバナリ

我國亦夕四圍ノ狀況ニ鑑ミ近ク軍需動員法ノ決定ヲ見タルハ國家ノ爲慶賀ノ至ニ堪カル所ナリ然ルニ目ヲ轉シテ此カ實質タル軍需品製造工業ヲ觀レバ不幸ニシテ未ダ模倣ノ域

脱セズ多年有識ノ士カ日夜斯業ニ盡瘁セルニ係ハラズ爾
來其獨創的發見ヲ獎勵ス可キ設備ニ乏ク加フルニ技術者ノ
不足ト經費ノ缺乏セルカ爲ノ僅カニ一ツノ理化學研究所ノ設
立ヲ見ルト雖未ク豫期ノ希望ヲ充スノ域ニ達セズ是レ斯業
ニ從事スル者ノ齊シク憂慮スル所ナリ就中機械工業ニ屬ス
ル方面ハ茲ニ須火ク此ヲ措キ火藥製造ヲ含ム化學工業ノ狀
況ヲ觀ルニ其研究施設ニ關シテハ開戦後漸次改良ノ曙光ヲ
認メ得ルニ至リシト雖彼ノ獨國ガ此戰役開始前ニ有セシ者
ニ比シ甚シキ軒輊アルハ勿論其英佛兩國ノ施設ガモ及バ
カルノ程度ニアルハ世ノ齊シク認ムル所ニシテ一旦不幸ニ
シテ不慮ノ事變ニ遭遇シ此種工業ノ動員ヲ施行スルニ際シ

二

テハ幾多ノ困難ノ之ニ附隨スルアリ直チニ其實ヲ擧ゲテ能
ク其需求ヲ充シ戰役ヲ有利ニ經過セシメ得ル事彼ノ獨國ノ
如キヲ得ルヤ否ヤ頗ル疑ナキ能ハカルナリ實ニ此種工業ニ
關シテハ學理並ニ實地ノ研究ニ於テ既ニ多クノ基礎ト經驗
トヲ有スル英佛兩國ニシテ尚ホ其眞價ヲ發揮スルニ幾多ノ
歲月ヲ要セシテ觀ルニ想半ニ過ギンノミ蓋シ戰時ニ於ケル
工業ノ動員ハ其編成ヲ完全ニ實施スルヲ得ハ其効果ノ眞價如
何ハ此種工業進步發展ノ程度如何ニ據ル可ク而シテ之ノ進
步發展程度ノ如何ハ又其科學ヲ遺憾ナク實地ニ適應セシメ
得ル程度ノ如何ニ職由スレハナリ此故ニ此種動員効果ノ眞
價ヲ問ハズンバ則チ止ム苟モ其眞價ヲ直チニ發揮セシメン

ト欲セハ須ラク先其根本ニ溯リ一日ニ速カニ此種施設ノ完備ニ勤メ斯畏工業ノ進歩發展ヲ企圖シ有事ノ秋ニ際シテ直チニ變ニ應ズルノ基礎ヲ確定シ置クベキナリ不肖斯畏ニ職ヲ奉ジ一員トシテ親シク業務ノ一部ニ携ルノ光榮ヲ有スルニ方リ諸種ノ事項ニ遭遇スル毎ニ想一度此種軍需化學工業ノ前途ニ及ハバ轉ク寒心ニ勝ヘカルモノアリ敢ヘテ菲オシモ省不茲ニ以下數項ニ亘リ裨見ヲ開陳シテ斧鉞高教ヲ仰ガントスル所以ナリ而シテ其大要ヲ一括シテ茲ニ記載セバ左ノ如シ

第一章 研究ノ方針ニ就テ

三

一 化學工業技術ノ進歩ハ左ノ各項研究ヲ系統的ニ實施シ徹底的ニ其實ヲ擧ゲルノ方針ニ出ツルヲ要ス

(其一) 實驗室内ニ於テ施行スル各種科學的ノ研究

(其二) 製造實驗場ニ於テ行フ比較的多量ノ製造研究

(其三) 工業實驗場ニテ工業的ニ施行シ多量ノ原料ヲ使

用シ必要ト認ムル時日間職工ヲシテ繼續セシム

ル研究

(其四) 數年間ニ亘リ(其三)ノ實行ヲ繼續スルノ研究

此種研究ヲ單ニ(其二)(其三)ニ止メズ(其四)ニ亘リ施行スルハ學術的研究ト異ナル所以ニシテ徹底的新案工業的研究法ノ妙味蓋シ茲ニ存ス

二前項(其四)ノ事項ハ既ニ幾多ノ經驗ヲ有スル既知ノ方法
ナル場合ニハ之ヲ省略シ得ベシ

三此種研究ノ方針ハ平時化學工業發展ノ淵源ニシテ世ノ
認メテ一般方針トセル所ナルノミナラズ特ニ戰時總體
ノ際其工業動員ノ眞價ヲ擧ケルニ著シキ貢獻ヲナセル
ハ歐洲戰役當初ノ實跡ニ徴シテ明ナリ宜シク我此種軍
需工業研究ノ方針ヲシテ此種徹底的ノ者ヲラシム可シ

第二章 研究員ニ就テ

一化學工業ノ研究中此種創意の新案ノ研究ハ難事中ノ難
事ニシテ從テ各専門科學ノ分科ニ精通セルノ人オラシテ

研究ノ全經過間ニ亘リ躬ヲ研究ニ從事セシムルヲ要ス

二一研究員ニ數多ノ事項ヲ同時ニ課スルハ徹底的効果ノ
實ヲ擧ケンカ爲メ研究員ヲ選スルノ所以ニアラズシテ
與フルニ充分ナル研究時日ヲ以テシ寧ロ其専門分科毎
ニ更ニ分割シテ研究セシメ協同的綜合的ニ其效果ヲ完
全ニ收ムルヲ要ス

三化學工業中火藥爆藥ノ工業ハ其技術ノ點ニ於テ比較的
多クノ専門分科ニ跨ルノ故ヲ以テ此種根本的ノ研究ニ
ハ又比較的少クノ高級研究員ヲ要ス

四此種研究効果ノ如何ハ一ニ從事スル人才ノ有無如何ニ
存ス而シテ此種人才ハ急遽容易ニ之ヲ得ベキニ非ス

如何ニ博學優秀ノ士ト雖モ一定ノ歲月間此種研究法ニ
經驗ヲ有スルニ非ザルヨリハ充分ノ技能ヲ發揮スルヲ
得ス此故ニ各專科有爲ノ士ヲ優遇シ物質上生活ノ不安ヲ感
ゼシメザルハ勿論形以上無形的満足ヲ得セシメ長ク安
ジテ此種ノ事業ニ從事セシムルハ徹底的効果ヲ擧ゲン
カ爲メ必極缺ク可カラザルノ要訣ナリトス

四 研究當事者ヲ中途ニテ交代セシムルハ徒ラニ其時日ヲ
遷延セシムルノミナラス往々ニシテ一時中止ノ已ムナ
キニ至リ或ハ効果ノ一部ヲ損失ニ終ルナキヲ保シ難シ
宣シク萬難ヲ排シテ其研究ト終始セシム可シ

五

第三章 設備ニ就テ

一 系統的の研究ヲシテ協同一致シ其効果ヲ有利ニ收メンガ
爲メ實驗場ヲ左ノ三種ニ大別シ各々其異レル目的ニ應
ジ其細部ニ亘リ設備ヲ完成スルヲ要ス

(其一) 科學的研究實驗場

(其二) 分析實驗場

(其三) 工業製造實驗場

二 圖書並ニ閲覧室ヲ完備シ標本室ヲ設ケテ研究ニ資スル
ヲ要ス

三 小修理工場等ノ補助機關ヲ附シ研究達成ヲ容易ナラシ
メ且其時日ヲ徒費セシメザルヲ要ス

(注意) 此種各機關ノ連繫ハ本文第三章ノ末尾ニ圖示ス
(一六頁参照)

第四章 編成ト經費ニ就テ

(一) 必要ノ經費ヲ投シテ研究設備ヲ完成スルヲ要ス
(其二) 大規模製造ニハ各々系統的三種實驗場ヨリナル一
連ノ研究所ヲ設ケ製造間惹起スル諸種ノ問題ヲ根
本的ニ解決スル事

(其三) 同種工業毎ニ一大中央研究所ヲ設ケ充分ノ設備ヲ
施シテ創意の新案ノ徹底的解決ヲ求ムル事

(四) 化學工業ノ研究ハ其機關ヲ單ニ中央ニシテ集中シ事務的
ニ統轄スルハ其工業ノ性質上効力少キ事

六

(五) 化學工業ノ研究ハ比較的少クノ設備ト年月ヲ要シ從テ
多額ノ費用ヲ投スルヲ要ス

第五章 結論

(一) 四圍ノ状勢ニ鑑ミ速ニ軍需化學工業ヲ其機械工業ト分
離經營マシメ其研究機關ヲ迅速ニ完備シ其技術ノ發展
ヲ促進スルヲ要ス

(二) 歐洲戰役ノ實跡ニ鑑ミ我陸軍中央部ニ軍事化學部ヲ特
設シ斯業特種ノ根本的研究及此種部外ノ研究ト連繫ヲ
保持シ工業動員ノ實施ト共ニ速カニ其効果ヲ徹底ニ收
ム可シ

三 現今陸軍火藥研究所ノ施設ハ目下ノ狀勢ニ鑑ミ不備ノ點少ナカラス速ニ其缺ヲ補ヒ其能率ヲ増進シ平戰兩時ニ於ケル當局ノ期待ヲ完フセシム可シ

(其二) 研究人員ハ少クモ尤ノ如クスルヲ要ス

高等官(長官共) 十人
技手差々ハ下士官 十七人

准士官書記(任) 三人

長官ノ待遇ハ初任迄シ所員ノ一名亦之ヲ初任トナシ得ルヲ要ス

(其三) 設備ト經費 現下ノ設備ハ改善ノ晚ト雖モ僅カニ前速ニ各稱實驗場タルノ實質ヲ有スルニ過ギズ速カニ

科學研究實驗場ト工業製造實驗場ノ設備ヲ完備スベク現時物質缺之時機ニ際シテハ其建設費ハ約百萬圓ヲ要スベシ

尙此施設ハ徹底的研究ノ首腦タル人士養成ノ點ヨリスルモ目下須臾モ遲延スベカラザルノ急務ナリトス

附 録

(一) 獨國「イハベルスベルヒ」中央科學技術研究所(火藥)施設ノ一般

(二) 本邦海軍科學及火藥研究施設一般並ニ農商務省工業試驗所ニ於ケル化學工業試驗所施設一般

本

論

338

裏面白紙

本論

第一章 研究ノ方針ニ就テ

化學工業ノ發展ハ其種類ノ何タルヲ論ビズ主トシテ其技術ノ進歩ニ因ラザルハナシ而シテ此技術ノ進歩ハ左記ノ要素ヲ完フスルニ及ンデ始テ是ヲ期待シ得ベキナリ則チ

- (一) 科學ノ學理ニ根底ヲ有シ之ヲ實地ニ適應スル事
- (二) 經驗ニ基キ常ニ齊一ナル優良製品ヲ得ル事
- (三) 需用ノ用途ニ適應スルノ加工ヲ完フスル事

是ナリ此故ニ科學的研究ヲ無視シテ茲ニ化學工業ノ進歩ナク經驗ヲ無視シテ亦ク此工業ノ發展ヲ期シ難ク其研究ガ秩序的ニ綜合セラレ積極的効果ヲ收メ得ルニ從テ益々技術ノ

莫價ヲ發揮シ此工業ノ發展ヲナシ得可キハ世ノ風ニ熟知スル所ナリ而シテ此目的ヲ達セシガ爲メ實施ス可キ方法ハ左記各項ノ研究ヲ緻密ナル注意ノ下ニ秩序ヲ逐テ系統的ニ實施シ徹底的ニ其實ヲ擧グルニ外ナラズ

其一 實驗室内ニ於テ施行スル各種科學的ノ研究

其二 製造實驗場ニテ行フ使用原料ヲ稍増加セル研究

其三 工業實驗場ニテ工業的ニ施行シ多量ノ原料ヲ使用シ

必要ト認ムル時日間職工ヲシテ繼續セシムル研究

其四 數年間ニ亘リ(其三)ノ實行ヲ繼續セルノ研究

以上列舉セル實驗研究ノ順序ヲ經テ常ニ良好ノ結果ヲ收メ得タルモノニシテ始テ工業的ニ効果アル新法ト稱ス可キナ

リ是レ一般學術上ノ研究方法ト稍趣ヲ異ニスル所ニシテ工
業技術研究ノ妙味又此内ニ存ス就中(其一)(其二)ノ研究ハ科
學的専門ノ智識ニ富メル有爲ノ士カ直接其衝ニ當リ創意的
新案ノ工業的應用ニ関シ其學術的價値如何ヲ判定スルモノ
ニシテ此等研究ノ結果ニシテ佳良ナル時ハ學術上ノ研究ト
シテハ既ニ充分ナル價値ヲ有スト^モ此等研究ノ實行ニ際
或ハ斯恩ノ智識ニ富メル助手ノ直接扶助ニヨルノ結果トシ
テ作業施行ノ際ニ發生スル幾多ノ變況ヲ呈スルコトアルモ
時々裡ニ其ノ智識ハ之ニ作用シ不知ノ間既ニ臨機ノ處置ヲ
施行シ從テ比較的良好ナル結果ヲ出現スルコトアリ今假ニ

ニ

共智識ニ乏シキ職工ヲシテ一定ノ方針ヲ與フルノミテ此作
業ニ從事スシノシカ常ニ同前ノ好果ヲ得ルヤ否ヲ疑ナク能
ハザルナリ加フルニ此種研究一般ノ場合ニアリテハ其使用
原料ノ量比較的少量ナルト作業時間亦比較的短キノ故ヲ以
テ装置ニ及ス外圍ノ影響動力並ニ原料品位ノ變差ガ此成果
ニ及ス愛態ヲ往々ニシテ蔽シ或ハ著シク現出スルコトナ
クシテ終ルコトアリ是レ單ニ此種學術上研究好果ノ故ノミ
ヲ以テ速ニ工業的良好ノ新法ト斷シ難ク從テ又(其三)以下
ノ研究ヲ要スル所以ナリ近年單ニ此種研究ノ結果ノミヲ以
テ新案特許ヲ公許セラレタル者少シトナサズ而シテ尚末ダ
工業ノ實地ニ使用セラレザル者其實例ニ乏カラザルハ此間

ノ消息ヲ明ニ語ル者ト謂可シ

其三ノ研究ハ主トシテ學術上良好ノ結果ヲ得タル新案ヲ實地工業的ニ適應セシメ其効果如何ヲ檢スルニ在リ之ガ爲其施行ス可キ作業ノ規模並ニ其状況ハ工業的ニ施行シ得ル最少限度ヲ以テ足レリトス而シテ斯恩有識者直接指導ノ下ニ職工ヲシテ一部其任ニ當ラシムルヲ一般トス又其使用原料動力等凡テ工業的ニ採用シ得ル者ヲ程度トシテ實施スルガ故ニ比較的良質ノ原料ヲ用ヒ整調ナル動力ヲ用エル學術上研究ノ結果ニ比シ不良ノ効果ヲ得ルヲ普通トス此間往々ニシテ又不慮ノ困難ニ遭遇シ更ニ幾多ノ努力ヲ要スルコトアルノミナラズ或ハ終ニ其意圖ヲ放棄セザルヲ得ザルノ悲境

三

ニ階ルコトヲキヨク難シ然レモ若シ此研究ニシテ更ニ良好ノ結果ヲ得シカ此新案ハ益ニ始メテ工業的有カノ資格ヲ生スルモノニシテ此等系統的ノ研究ガ既ニ同種作業ヲ實行シツツアル工業企業ノ下ニ遂行セラレアル場合ニハ既ニ同種事項ノ一般ニ関シ永年ノ經驗ヲ有スルノ故ヲ以テ直チニ其適否ヲ判定シ得ベシト雖此若シ此等ノ新案ニシテ全然異ナレル新施設ヲ要スル者アラン乎尙末ダ此種ノ結果ノミヲ以テ技術的研究ノ完結ト認定スルヲ得ズ蓋シ其經驗ヲ有セザルノ結果トシテ使用原料品質微細ノ變化並ニ其施設ニ於ケル僅微ノ瑕瑾又ハ此種工業ノ特有トセル衛生上從業者ニ及ス害毒等其作業期間ノ永續ト共ニ漸次積テ重大ノ現

象ヲ提起シ其甚キニ至テハ一時作業ヲ中止スルノ悲境ニ陥ル無キヲ保シ難キヲ以テナリ是レ此種技術的研究ヲ徹底セシガ爲メニハ更ニ數年間ノ經驗ヲ要スル所以ニシテ(其四)ニ於テ好果ヲ收ムルニ及ンデ始メテ此新案採用ヲ断言シ得可キナリ

以上列舉セル所ハ化學工業ニ關スル技術ノ進歩ヲ獨創的積極的ニ進行セシムル爲メニ採ル可キ研究方針ノ神髓ニシテ當テ斯思ニ著大ノ發展ヲ遂ゲ世思ニ雄飛セル獨國ノ夙ニ準據セル所ナリトス彼ノ各種人造的合成法ヲ工業的ニ巧ニ成効セルノミナラズ火藥爆藥工業ニ顯著ナル發展ヲ遂ゲ得タルハ一方ニ於テ其經營法宜ヲ得タルニ因ルト虽モ其技術

四

ノ進歩ニ關シ研究ノ方針ヲ常ニ徹底的ナリシニ因ラズンバアラズ曩ニ大正三年歐州戰役ノ開始セララルヤ其戰局ノ進展ト共ニ敵軍重圍ノ中ニ處シ兵器彈藥衛生材料ノ如キ直接戰鬥ノ用ニ供セララル者ハ勿論民間休養ニ關スル必需品ニ至ル迄事苟モ此化學工業ノ範圍ニ屬スルモハ着々有効ニ其(決)解ヲ行ヒ其資源ニ窮スルノ今日ト虽モ有無相償ヒ免ニ爾其需給ノ要ヲ充シツツアルハ一ツハ完全ナル工業動員法ヲ齎ス所ナリト虽モ主トシテ其技術ノ巧妙ト其研究方針ガ常ニ徹底的ナリシニ歸セザルヲ得ズ而シテ戰戰ノ當初爾余各國ノ狀況ヲ觀ルニ化學工業品ノ缺乏ヲ感ゼサルハナク英佛兩國ハ勿論其他ノ中立國ニ於ケル斯般ハ其需求ノ必要ニ

迫ラレ此種工業ノ發展ヲ企圖シ攻究討議スル所アリ而シテ
各國新畧ノ大家ノ説各々其國狀ヲ異ニスルニ從ヒ其詳細ニ
亘リテ考少ノ差異アリト雖比其技術ノ進歩ヲ謀ラシガ爲メ
採ル可キ研究ノ方針ニ至リテハ殆ド皆獨國ノ施設ヲ推賞セ
セザル者ナシ爾來各國此種ノ方針ヲ採用シ軍需動員ノ効果
ト相俟テ需求ノ急ヲ補ヒツツアリ就中米國現時新畧ノ發展
ハ末ダ獨國ノ域ニ達セズト雖比特ニ注目ニ價スル者アリ
蓋シ其原料ヲ有スルコト豊富ニシテ比較的巨額ノ費ヲ新業
ニ投ゼルハ其一因ナル可シト雖比世界需品ノ自給ヲ速ニ解
決セルハ主トシテ開戦前既ニ數年ニ亘リ此種研究ノ方針ヲ
是認シ致々トシテ技術ノ進歩ニ努力シ確固タル其素因ヲ有

五

ニシニ因ル而シテ本邦新畧ノ狀況ヲ見ルニ又此戦役ノ影響
ヲ受ケ技術上此種研究ノ急務ヲルヲ喧傳セララルルニ至リ既
ニ適宜ノ設備ヲ設ケ此種方針ニ從ヒ其研究ニ着手セル者ア
ルヲ聞ク是レ斯畧ノ前途ニ對シ邦家ノ爲メ慶賀ニ堪ヘザル
事實ナリ然レハ軍需動員ニ當リテ其化學製品中主ナル一部
ヲ占ムル火藥爆藥ノ製造工業ニ關シテハ末ダ此種研究ノ主
趣ヲ完全ニ遂行シ得ルノ施設ニ缺タル所アリ是斯畧ノ永年
遺憾トスル所ニシテ其世畧ノ現状ニ徴シ斯業前途ノ爲メ憂
慮ニ堪ザル所以ナリ微カニ聞ク所ニ因レバ我海軍亦茲ニ見
ルアリ本年既ニ此種研究施設ノ大改善ニ着手スト宜ク速カ
ニ新畧有識ノ士ヲ集メ其設備ノ缺ヲ補ヒ必要ノ經費ヲ投シ

予其研究ヲ徹底セシムヘキナリ
蓋シ前述此種研究ノ方針ハ嘗ニ世民ノ輿論タルノミナラズ
其効果ノ顯著ナルハ彼ノ歐米各國ノ實例ガ此ヲ證スルコト
明ナレバナリ

第二章 研究員ニ就テ

現今科學ノ進歩ニ伴ヒ化學ニ屬スル範圍復タ數考ノ分科ニ
別レ其研究漸ク進テ深遠ノ域ニ進ミツツアルハ世ノ汎ク知
ル所ニシテ其全般ニ亘リテ能ク蘊奧ヲ極メントスルハ到底
個人ノ能クスル所ニ非ザル亦周知ノ事實ナリ而シテ此間ニ
處シ前述ノ方針ニ從ヒ其種研究ヲ施行シ然モ徹底的効果ヲ

六

譽ゲントセバ勢ヒ此種ノ專門ニ関シ有識ノ士ヲシテ直接事
ニ當ラシメ常ニ此研究ト終始セシメザル可カラズ
蓋シ此種ノ研究ニハ常ニ幾多困難ノ伴フヲ普通トシ從テ此
新案創意者ノ如キ卓越ノ智識ト經驗ヲ有スル者ニアラザル
ヨリハ其成效得テ期シ難キヲ一般トセバナリ彼ノ徒ニ數多
ノ研究ヲ同時ニ個人ニ課シ一種ノ事務的統轄法ニヨリ此ガ
解決ヲ得ントスルガ如キハ誤レルノ甚シキモノト謂フ可シ
若シ皮想ノ結果ヲ以テ満足セバ則チ已ム苟モ其根本ニ遡リ
徹底的効果ヲ収メント欲セバ假令單一事項ノ研究ト雖モ其
攻究ノ範圍ヲ他ノ專門ニ亘ル者ニアリテハ更ニ其分科有識
ノ士ヲシテ共一部ヲ別ニ研究セシメ協同的研究ノ舉ニ出ス

可キナリ之ヲ要スルニ此種研究効果ノ如何ハ徒ラニ其結果
ヲ得ルノ數ヲ非スシテ寧ロ少數ナルモ徹底的ナルヲ貴
トシ從テ之ニ從事スル人才ヲ得ルノ有無ニ関シ其事項カ各
種分科ノ専門ニ跨リ困難ノ度ヲ増スト共ニ數件ヲ同時ニ遂
行セントスルニ從テ益々其人才ノ多寡ヲ要スルヲ知ル可シ
而シテ火藥爆藥ノ製造ハ化學工業中技術ノ点ニ於テ比較的
多種専門分科ノ智識ヲ要スルノ部類ニ屬シ從テ前述研究ノ
方針ニ進ミ徹底的ニ之ヲ遂行セント欲セバ勢ヒ比較的多數
ノ人才ヲ要スルハ亦理ノ然ラシムル所ナリトス
歐洲各國中此種ノ主眼ヲ遺憾ナク貫徹シツアルハ彼ノ獨
國ニシテ業ニ大正元年末同國駐在勤務ヲ終ルト同時ニ此種

七

統系的數字ヲ基礎トシテ報告セルガ如シ而シテ其他ノ各國
ヲ觀ルニ斯ノ識者間ニハ往々此説ヲ唱ヘシ者アリシト雖
ニ歐洲斯ノ先進國ニシテ此實施ノ境ニ入りシハ實ニ今四
戰役開始ノ後ニシテ此種科學ノ進歩ニ関シ既ニ幾多ノ素因
ヲ有セルニ係ハラズ或程度ノ効果ヲ收メシガ爲メハ爾後
尙數多ノ歲月ヲ要セシ實跡ニ徴セバ此種徹底的効果ヲ收ム
ルハ致テ容易ノ業ニ非スシテ茲ニ直ニ各種専門分科ニ亘リ
同時ニ數多ノ人才ヲ集メ得タリトスルモ其要求ヲ完全ニ充
シ得ルハ短日月ノ能クシ得ル所ニ非サルヲ知ル可シ
此故ニ平時多クノ人才ヲ集メ斯業發展ノ爲メ此種ノ研究ヲ
施行ス可キハ勿論ナリト雖モ其狀況ノ許ス範圍内ニ於テ更

ニ其人員ヲ増加シ戰時代用品ニ關スル徹底的研究ヲ施行シ
置クハ其急ニ應ゼンガ爲メ亦緊要ノ一事ニシテ特ニ火藥爆
藥ニ於テ其然ルヲ見ル里テ其必要ニ應ジ數多ノ人才ヲ收容
シ一氣呵成的ノ方針ヲ排シ與フルニ必要ノ日月ヲ以テ一時
的目前ノ利害ヲ顧ズ專心斯段ノ研究ニ從事セシノ以テ徹底
的効果ヲ擧グ可キナリ是現今各國斯段ノ輿論ニシテ既ニ其
討議ノ時代ヲ去リ實行ノ時勢ニ遷リタルハ之ヲ遠ク歐米斯
段ノ實例ニ求ムルヲ要セズ本邦斯段ノ一部ガ既ニ其實行ニ
着手シツツアルニ徴シテ明ナリ
以テノ事實ヲ實現セントスルニ際シテ直チニ遭遇スル困難
ハ此種専門分科科學ニ精通シ此種研究ニ適スル人才ヲ得ル

八

不明

ニナリ是レ現今高等學府ノ課程ガ其専門科學一般基礎ノ概
念ヲ與フルニ止マリ其業ヲ半レル者ト虽比更ニ其分科ノ詳
細ニ亘リ實地ト併セテ幾少ノ歲月ヲ研鑽スルニ非ズンハ未
ダ以テ斯段ニ精通ノ者ト稱スルヲ得ザレバナリ而シテ此種
研究ノ遂行ニ際シテハ當ニ精勵努力スルノミナラズ躬ヲ興
味ヲ以テ事ニ從事シ研究補助者ヲ獎勵指導シ他ノ専門分科
ノ研究ト相俟テ協同的研究ノ實ヲ擧ゲ得ルガ如キ資性ヲ有
スル者ナルヲ要スルニ至ラ蓋々共通才ヲ得ルニ困難ノ度ヲ
増進スル所以ナリ此故ニ歐米ノ各國ハ勿論近年本邦斯段ノ
趨勢ハ此等有識ノ士ヲ優待シ考テノ適才ヲ集ムルニ吸々々
ノ而シテ其方法ニ至リテハ各々其細部ニ亘リ少少差異アリ

リト英比要ハ

(一) 其生活ノ安固ヲ得セシメ

(二) 設備ヲ完全ニシテ其意圖ニ從ヒ充分ナル經費ト歳

月ヲ與ヘテ研究ノ達成ヲ扶助ス

ルニアリ蓋シ(一)ノ要件ハ後顧ノ患ナク専心事ニ當ラシメン

カ為ノ必要ノ條件ニシテ(二)ハ此種ノ人士ニ對シ莫天分ヲ發

揮セシムルノ點ニ於テ精神上ニ偉大ノ満足ヲ得セシメ得ベ

ク又一種ノ優待法ニシテ若シ此研究ニシテ成功ノ域ニ達セ

ンカ其當事者自身満足ノ程度ハ往々ニシテ局外者ノ豫想ニ

幾倍スルモノアリ亦以テ一種ノ賞與ナル價値ヲ失ハブレバ

ナリ世ノ此種有為ノ士ヲ待ツニ(一)ノ要件ヲ満足セシムルニ

九

吝ナルノミナラズ(二)ノ要件ヲ充スニ當テ其經費前者ニ比シ

更ニ著大ノ額ニ上ルノ故ヲ以テ往々ニシテ其主題ニ戻ルノ

場合少ナカラズ為ニ責任ヲ重ズル有為ノ士ヲシテ長ク其職

ニ止マルヲ潔トセズ或テ其研究ヲ中絶シ甚シクニ至リテハ

有為ノ企圖ヲ廢滅ニ歸セシモノナシトセズ是レ斯限進歩ノ

為ノ頗ル遺憾トスル所ナリ

世式ハ説クナス者アリ此等研究ノ經過ヲ詳細ニ記録スルヲ

得ベ其研究ハ後繼者ヲシテ直ニ繼承シ得ベシト是一面ノ

真理ナキニ非ズト強ク此等創意的新案ノ研究ヲ一種ノ事務

ト同一視スルノ觀念ニヨリ一律ノ下ニ解決セントスルノ誤

解ニ基ク者ニシテ少シク此種ノ事業ニ從事セル者ノ遽カニ

首肯シ得ザル所ナリトス既ニ幾多ノ経験ヲ積ミ其施行法ニ
一定ノ規定ヲ得タル故ノ分拆作業ノ如キ又ハ研究ト實驗ト
ヲ併ニ常ニ好果ヲ収メツツアル製造法ノ如キハ既ニ研究終
レル一種ノ完成法ナルガ故ニ其詳細ナル記録ヲ以テ再び類
似ノ状況ヲ再現シ得ベシト雖此種研究中途ノ者ニアリテ
ハ其状況稍々之ト異ナル者アリ將來更ニ續行スベキ研究ノ
計画ハ公然既ニ施行セラレタル各種ノ實驗現象ヲ些細ニ亘
リ慎重觀察シ之ヲ基礎トシテ決定セザルヲ得ズ而シテ今日
前ニ發ル所ハ單ニ一種ノ記録ニ止リ如何ニ詳細ヲ盡シアル
ノ記録ト雖モ時々刻々ニ變化シツツアル状況ノ全部ヲ活画
的ニ記述シ置テ事ハ到底不可能ナルヲ一般トシ少クモ之ガ

十

基礎タル實驗ハ百行スルノ必要アリ其施行難易程度ノ如何
ニヨリ其遷延時日ノ程度ヲ異ニスト雖モ予クハ更ニ長キ時
日ヲ徒費スルヲ一般トス加之ナラズ此種ノ研究ガ常ニ工業
實驗ヲ伴フノ結果トシテ此際研究當事者ノ精神的作用ハ又
大ニ考慮ニ値ス可キ者アリ即チ其能否信念ノ如何ハ往々ニ
シテ其成績ヲ左右スルコトアレバナリ是當ニ無智ノ職工ニ
於テノミ然ルニ非スシテ科學ニ相當ノ智識アル研究助手ト
雖比不~~同~~同往々ニシテ職工ノ意志ニ同化セラレ實際ノ真
理ニ反シタル報告ヲナスハ決シテ稀有ノ事ニ非ザルナリ此
際ニ當テ此ガ妄ヲ排シ其因ヲ來ル誤謬ノ根元ヲ摘發シ助手
以下各其從業員ヲ正當ニ指導シ合理ノ結果ヲ得ル如ク之ヲ

不明

矯正シ得ルハ此種創意的發案者ニシテ自ラ科學的研究ノ結
 果ニヨリ此新案ノ方法ニ對シ確固ナル可能的信念ヲ有スル
 或ハ少クモ其研究ノ科學的實驗ノ域ニ適リ其基礎ノ試驗
 ノ一部ト使用原料ヲ增加セル製造實驗トヲ自ラ再行精査シ
 確實ナル可能的信念ヲ有スル者ニ非ザルヨリハ蓋シ不能ノ事ニ屬
 シ此等高級當事者ノ變更ハ恰ニ其研究ノ大半ヲ再ニ開始ス
 ルト大差ナキ時日ヲ徒費スルカ然ラザレバ可能的良好ノ新
 案ニ遂ニ不可能ノ判決ノ下ニ往クニシテ葬リ去ラルルノ患
 ナシトセズ此故ニ此種化學的研究ヲ有効ニ進行セシメンガ
 爲ニハ其高級當事者ヲ變更スルコトナク終始一貫シテ有効
 ナル結果ニ到達セシム可キナリ加フルニ此種ノ研究ハ一徹
 比較的長キ時日ヲ要シ單ニ一事項ヲ專心攻究スルモ尚十
 有余年ノ歲月ニ亘レルノ實例鮮ナカラズ此故ニ卒先此種ノ
 施設ニ從事セル彼ノ獨國ノ如キ此種研究所ノ業務ニ從事ス
 ルコト十五年以上ノ勤續高級研究員ニ乏カラザルハ能ク此
 間消息ノ詳細ヲ語テ余アリト謂フ可シ

十一

第三章 設備ニ就テ

化學工業ノ發展ヲ企圖シ前速ノ研究方針ニ從ヒテ有識ノ
 士ヲシテ各其専門分科ニ從ヒ協同的研究ニ從事セシメ其効
 果ヲ徹底的ニ取ノントセバ勢ニ之ニ緊要ナル施設ヲ完備ス
 可キハ又必要歟ク可カラザル要件ノ一ニシテ其完否程度ノ

如何ハ書ニ此種研究時日ノ長短ヲ左右スルニ止ラズ此主
タル効果ノ價值如何ヲ支配スルハ斯思ノ風ニ認ムル所ナリ
此故ニ斯業ノ種類並ニ其規模ノ大小ニヨリ研究設備ニ多少
ノ差異アリト云レ尚モ此種ノ研究ヲ實行セント欲セバ秩序
的ニ實驗場ヲ左ノ三種ニ大別シ則ケ

其一 科學的實驗場

其二 分析實驗場

其三 工業的製造實驗場

トナシ此等ノ完全ニ設備シテ協同事ニ當ランメ徹底的效果
ヲ收ム可キナリ而シテ此種實驗場ニ於ケル設備ハ其施行ス
ルニ研究業務ノ異ナルニ從ヒ稍共趣ヲ異ニシ概テ左ノ方針

十二

ニ準據スルヲ一般トス

(其一) 科學的實驗場

ハ主トシテ科學ヲ實地ニ利用セ
シガ爲ノ施行ス可キ學術的研究ノ全部ヲ實施スルヲ本務ト
シ從テ其研究ノ程度ケ頗ル緻密詳細ニ巨ルノ故ヲ以テ其設
備ノ一般ケ大學研究室ノ者ニ比シ少クモ同等ノ程度タル可
キハ勿論寧ロ其専門事項ニ関シテハ更ニ一步ヲ進メテ之ヲ
究備シ研究時日ノ徒費ヲ防遏スルニ勤ム可ク又比較的考テノ
助手ヲ使用スルヲ要シ其研究室ノ大サ亦比較的大ナルヲ一
般トス要スルニ化學工業發展ノ淵源ハ實ニ此種研究室ニ胚
胎スルカ故ニ各研究員毎ニ之ヲ設ケ經費ヲ吝マズ其設備ヲ
完整シ當事者ヲシテ研究遂行上不便ナリトノ嘆聲ヲ發セシ

ノザルヲ緊要トス

(其二) 余拆實驗場

ハ主トシテ新業・使用スル原料

半途品並ニ其成品品位ヲ鑑別シ此種科學的並ニ工業的製造
研究場ノ中間ニ在テ作業シ常ニ両者間ニ惹起スル事項判定
ニ極要ナル規準ヲ與フルヲ以テ任トス而シテ此實驗場ノ位
置ハ前記(其一)ト同一建築内ニアルヲ普通トシ其設備亦殆
ト相等シ然レ此内ニ操作スル人員ノ多数ハ其操作ガ他ニ
比シ一定ニシテ常ニ同一事項ヲ反復施行シ稍機械的動作ヲ
必要トスルノ故ヲ以テ甚シク高級ノ智識ヲ全員ニ亘リ有ス
ルノ必要ナク比較的少数ノ實驗者ヲ廣キ一室内ニ於テ作業
セシムルヲ一般トス從テ場内ノ秩序ト清淨トハ他ノ實驗場

十三

ニ比シテ考テノ顧慮ヲ要ス可ク其設備亦之ニ稱フヲ要シ完
全ナル施設ヲ行ヒテ遺漏ナキヲ期セザル可カラズ世往々ニ
シテ此種ノ操作ガ機械的ニ傾クノ故ヲ以テ此種實驗場ヲ輕
視スルノ傾向アリト虽此種従業員ハ其部分ノ操作ニ熟達
シ常ニ確實ナル結果ヲ提出シ研究事項ヲ補佐スルノ点ニ至
リテハ余人ヲシテ容易ニ窺知スルヲ得ザルノ伎倆ヲ有スル
者鮮カラス實ニ此種實驗室ニシテ完全ノ設備ヲ有シ精勵英
業務ニ盡瘁スル者ハ皆ニ此種科學的研究ノ有力ナル扶助者
タルノミナラズ工業的製造研究ノ寶庫タリ加之ナラズ此種
ノ操作ハ千遍一律ニシテ其従業員ヲシテ柱々乾燥無味ノ感
ヲ惹起セシムルノ嫌ナキ能ハズ而カモ其業務ト終始シテ伎

傾キ失墜セシメズ能ク其任ヲ究フセシメントセバ物質上之ヲ優待ス可ハ勿論ナリト虽其設備ヲ完全ニシ常ニ興味ヲ以テ事ニ當リ得ルガ如ク無形上ニ好過スル事ハ緊要ナリ
(其三) 工業的製造實驗場
一主トシテ左記ノ目的ヲ達セシガ為ノ實地工業的ニ決定的解決ヲ得ルヲ以テ任トス
即チ

(一) 創意的新法ヲ工業的ニ實施シ之ニ適應セシムルコト
(二) 從來施行セル作業法ノ欠点ヲ補醫スル新案ヲ實地ニ適應スルコト

ヲ遺憾ナク攻究シ新法ヲ創ムルガ為ノ基礎法ヲ工業的ニ解決スルノミナラズ既設法ヲ改善スルノ實地的判定ヲ得ル

十四

ヲ以テ任トス此故ニ此實驗場ノ設備亦前二者ト稍其趣ヲ異ニスルハ勢免ルベカラザル所ニシテ實際作業工場ノ如ク建築セル屋内ニ各種ノ作業ヲ實際ノ程度ニ施行シ得ルガ如キ最少限度ニ應スル小形諸装置ヲ完備シ冗費ヲ節シテ此種研究終局ノ目的ヲ達成セシムルヲ勤ム可シ

以上列挙セル三種ノ實驗場ハ此種研究方針ヲ實施セシガ為ノ須臾モ缺ク可カラザルノ設備ニシテ此ト同時ニ等閑ニ附ス可カラザルハ

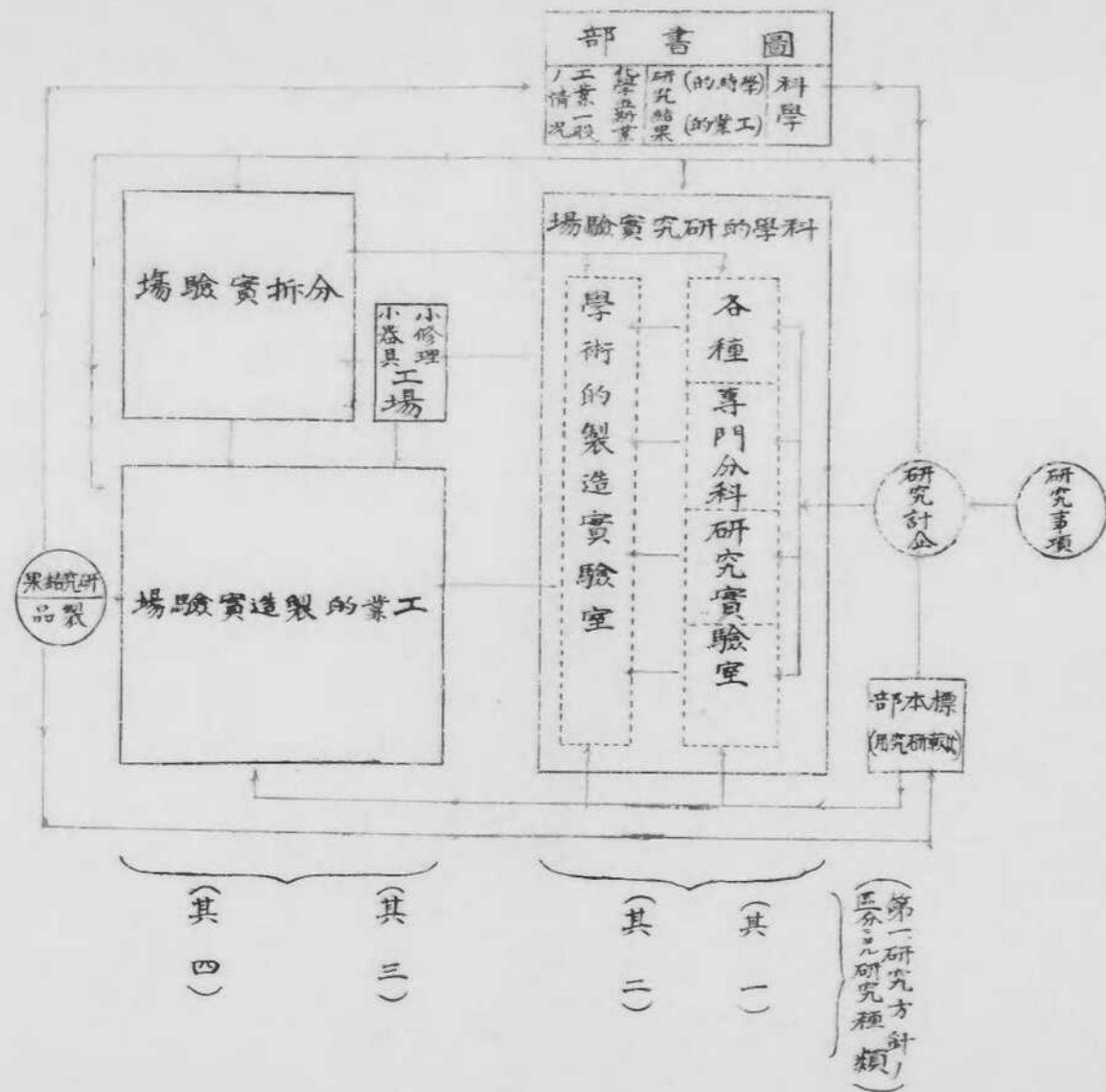
圖書室ノ設備ナリトス蓋シ此種研究ノ神髓ハ科學ノ進歩ト密接ナル連續ヲ要シ此主動者タル研究員ヲシテ斯段ノ進歩ニ伴ハシムルノミナラズ其専攻分科ノ事項ニ至リテハ更

行方
研究
品ヲ以テ

ニ種一歩ヲ進メテ新域ヲ開拓セシムルヲ要スレバナリ而シテ此目的ヲ達センカ為メニハ此種専門科學ニ関スル研究報告書類ハ國ノ内外ヲ問ハズ洽ク之ヲ聚集スルハ勿論此他同種ノ参考圖書ヲ備ヘ研究者ヲシテ常ニ新智識ヲ容易ニ涉獵シ且ツ必要ニ應ジ從來既ニ施行セラレタル研究結果ヲ其根本ニ遡リ為シ得ル限り迅速ニ調査シ得ベカラシムルヲ要ス此他尚此設備ニ関連シ此種研究所ノ能率ヲ増大スルニ與テ力アルモノハ各種ノ研究装置小修理場ナリトス是レ此種ノ研究ニハ号ヲ創意的ノ新装置ヲ要シ從テ市井ニ於ケル普通品ヲ以テ直チニ代用シ得ベカラザルヲ一般トス此故ニ一旦小破ノ難ニ遭遇センカ是カ修繕ニ無用ノ時日ヲ徒費スルノ

十三

弊アルヲ以テナリ時ニ此種研究場ニシテ都市ヲ隔ルコト遠ク且其交通比較的不便ノ地ニ設置セラルルヲ一般トスルハ藥外科ノ者ニアリテハ其不利ノ程度ヲ増シ大ナラシムルヲ普通トス
今研究事項ヲ系統的ニ遂行スルニ際シ其設備トノ關係ヲ畧圖ヲ以テ示セバ概本左ノ如シ



裏面白紙

第四章 編成ト經費ニ就テ

化學工業ト前記各種ノ研究實驗場トハ密接ノ關係ヲ有シ其
技術發展ニ関シテハ樞要數ヲ可カラザル一機關ナリトス此
故ニ其工業ノ種類ニ應ジ一企業ノ為ニハ少クモ此種ノ完
全ナル一系統的設備ヲ特設スルヲ緊要トシ為シ得レバ各其
製造工場毎ニ更ニ一連ノ設備ヲ設クルヲ以テ最良トス然ル
ニ此等實驗場作業ノ目的ガ一般工場ニ於ケル者ト異ナルハ
前數項ニ互リテ記述セルガ如シ從テ其設備費亦一般工場各
部ノ如ク其必要ニ應ジテ簡易且廉價ニ設備スルヲ費ブト全
ク其趣ヲ異ニシ普通劣大ノ費用ヲ要スルヲ一般トス加之ナ
ラズ此等ノ設備ハ其初メ計畫セル設備ヲ以テ研究ヲ開始ス

七七

ルニ進行上各種ノ事實ニ遭遇シテ各種設備ノ要求ヲ生ジ
益々其費用ヲ増大スルハ勢ヒ免ル可カラザル所ニシテ其當
事研究員ガ有為ノ才能ヲ發揮スルト精勵事ニ從事スルニ從
テ益々此種ノ要求ヲ増大ス寧ロ此種ノ要求ナキハ其研究ニ
銳意ナラザルノ反證ナリト謂フ可シ
此故ニ此種研究ニ要スル費用ハ普通巨額ニ上ルヲ一般トシ
必要ノ經費ヲ投ジテ各々ザルノ程度ヲ増ニ從テ益々其効果
ヲ迅速有利ニ取メ得ベシ從テ小規模ノ企業ニナリテハ之等
ヲ完全ニ設備スルハ其負擔ニ到底堪ザル所ニシテ自家工業
ノ經營ニ直接必要ナル余拆實驗場ヲ有スルノニニシテ他ノ
要務ハ國主工業研究所ニ依頼セザルヲ得ズ中規模企業ノ者

ニアリテモ此全部ヲ完
シテ考クハ分拆並ニ工
ヲ異ニスル毎ニ數個ノ
立シ協同利益ノ点ニ關
シテ大規模企業ノ者ニ
テ投ジテ設置シ得可ク
之ナラズ其工業ノ種類
同ノ下ニ比較的巨額ノ
的根木問題ノ解決ヲ企
メ得ルノ利アリ
元來此種ノ大研究所ハ

リト云ハ大藥、燐、藥、蘇、皮
ニ惹起スル所ノ問題ハ
場並ニ國立研究場ニ於
蓋シ此種ノ研究ハ醫、
者ニ非ズシテ其創業以
ニ益々分岐スルヲ以テ
種ノ問題中各自家特異
場ニ於テ處理シ更ニ協
場ニ於テ解決セバ徹底的
ニ此種ノ目的ヲ完全ニ
究ニ投ズルノ必要ヲ生

大企業ニ遷移スルノ趨勢ヲ有スルニ與テカアル主因ノ一
リトス

獨國ニ於ケル此種ノ施設ハ嘗テ前世紀ノ半ニ於テ同國財政
上ノ見知ヨリ往々反對ノ意見ヲ有セル者アリシニ係ラズ政
府ハ「リービッヒ」氏ノ事業ニ激勵セラレ此種ノ研究方針ヲ採
用シ比較的尙大ノ費用ヲ投ジテ人才ノ養成ニ從事シ各企業
ハ競フテ此種ノ設備ヲ完成シ現今斯業發展ノ基礎ヲ確定セ
リ近年歐洲戰役ノ開始前ニ於テ此種大規模工業ノ研究施設
ハ比較的尙大ノ費ヲ投ジテ其設備ヲ完成シ斯道專門分科ノ
士ニシテ大學課程ヲ終レル者ヲ尙ク蒐集シ研究ニ盡瘁セシ
メツツアリシハ世ノ風ニ知ル所ニシテ此ノ如キ一企業ニシ

十九

テ數十名ノ學士研究員ヲ有スル者少ナカラス其數實
ニ數百ニ及ベル者アリ此他彼ノ火藥爆藥工業ノ如キハ各企
業毎ニ前記ノ設備ヲ有スルニ係ラズ尙一ツノ中央科學研究
所ヲ設立シ尙ク人員ト費用ヲ投ジテ研究セシメタリ而シ
テ此種研究ニ投セル費用ト時日ハ其難易ニヨリ尙少ク差異
アリト雖ハ一研究事項ニ數百乃至數千萬圓ヲ費シ借スニ數
年乃至十數年ノ時日ヲ以テシ徹底的ニ其結果ヲ収ムルニ勤
メタリ然ルニ此効果ノ程度ハ嘗ニ平時其投セル經費ヲ償テ
餘リアルノミナラズ戰時工業動員ニ當リテ其大ノ効驗ヲ呈
セルハ銘ニ謀ケテ要セザル事實ナリトス英佛ノ兩國亦並ニ
觀ルアリ戰役開始前ニ於ケル此種施設ノ缺陷ヲ補ヒ尙大ノ

費用ヲ投ジテ此目的ノ達成ニ勤メツツアリ

歐洲戰役開始ノ以前ニ於テ能ク此間ノ消息ニ通ジ巨額ノ費
ヲ投ジテ此種施設實行ノ緒ニ就ケル者ハ彼ノ米國ニシテ戰
前獨國斯恩ノ輿論ヲ認メテ將來斯業ノ一大強敵トセル其主
因ノ一亦茲ニ存ス而シテ往年其參戰スルヤ彼ノ空中空素
因定問題ノ如キ比較的短時日ニ於テ能ク其効果ヲ收メ得
ルノ事實ハ既ニ此間ノ消息ヲ傳ヘテ余アリ翻テ本邦斯恩ノ
狀況ヲ觀ルニ斯業中所謂大企業ニ屬スルモノハ漸次此種ノ
施設ニ費ヲ投ズルニ至リ其發展ヲ期シツツアルノミナラズ
中以下企業ノ爲メ政府ハ工業試驗場ノ擴張ヲ決シ理化學研
究所ノ設立ト相俟テ將來斯業ノ發展ヲ期シツツアルハ國家

二十

ノ爲メ廢棄ス可キ事ナリト雖其研究施設ノ日尚淺クシテ
而モ解決ヲ要スル難問積推セルノ今日斯業經營上其經濟的
見知ヨリシテ戰時軍國ノ希望ト利益互ニ一致セザル者アリ
從テ軍需化學工業ニ關スル研究事項ヲ一般工業發展ニミ
依賴セバ其解決ノ時期ヲ頗ル遙遠セシムルノ憂ナキ難ハズ
此故ニ本邦ノ海軍亦茲ニ觀ルアリ兵器艦艇ノ研究設計ニ從
來技術本部ノ機關アルニ係ラズ更ニ理科學研究部ヲ増設シ
其專門分科ノ士十有七名ヲシテ各分科毎ニ各人ニ必要ノ設
備ヲ與ハ根本的研究ノ基礎ヲ開始セントシツツアリ而シテ
其火藥爆藥ニ關スル事項ハ特種ノ設備並ニ取扱及注意ヲ要
スルノ故ヲ以テ之ヲ研究部ヲ平塚ニ置キ六名ノ專攻員ト之

レニ要メル研究設備ヲ設ケ又其彈道的並ニ保存ニ関スル研
究ハ吳吉浦火藥試驗所ヲ更ニ擴張シ十有一名ノ專攻員ヲ置
キ理化學研究部ト協同研究ニ從事シ科學ノ智識ヲ實地軍需
ノ工業ニ應用シ徹底的効果ヲ収メントシソツアリ今回工業動
員法ノ制定ト共ニ其効果ヲシテ充分ナラシメンガ爲メ近ク
我當局ニ一新機關ノ増設アルヤニ關シハ斯業ニ從事スル者
ノ齊シク欣喜ニ堪ヘザル所ニシテ更ニ百入等頭尚一步ヲ進
メテ此種ノ施設ヲ完成シ工業動員實施ノ時ニ於テ可及的迅
速ニ其實功ヲ舉グルニ勤ム可キハ蓋シ本邦化學工業ノ現況
ニ徴シ何人モ異論ヲ唱ヘザル所ナレバナリ

二十一

第五章 結論

化學工業ノ發展ニ関シ其性質カ機械工業ト異ナルノ故ヲ以テ特別ニ經營スルヲ有利トスルハ吾界ノ定論ニシテ歐米ノ各國ニ於ケル者ハ勿論本邦ニ於ケル斯界亦ク此兩種工業ヲ分離經營シツ、アルハ吾ノ夙ク熟知スル所ナリ我當局夙ニ茲ニ見ルアリ軍需工業中此兩種ヲ分離經營セシメントノ企圖ヲ有セラル、ハ斯業ニ從事スル者、斯界將來ノ發展ニ関シ膏シク慶賀ニ堪ヘザル所ナリトス而シテ我海軍ニ於ケル此種ノ施設ハ現今既ニ着手トシテ實行ノ途ニ就キツ、アリ其製造工場ノ規模ニ於テ將其製品ノ種類ト量ニ於テ達カニ優レル我陸軍新兵器工業ノ急メ其實行ノ域ニ達シ得サルハ頗ル

二二

遺憾トスル所ナリ然レドモ此種工業發展ノ要素タル研究ノ施設ニ至リテハ工業動員ノ效果ヲ有利ニ收メンガ爲メ其施設實行ノ上ニ於テ更ニ急ヲ要スル者アリ蓋シ此種徹底的ノ研究ハ各種ノ専門分科ニ亘ルノミナラズ比較的多少ノ歲月ヲ要シ一察ニ巨額ノ費用ト數千ノ人オヲ投スルモ復之ヲ如何トモスルヲ得ザレバナリ此等ノ事實ハ歐洲戰役開始ノ當初ニ當リテ英佛各國ノ親シク經歷セル所ニシテ而シテ此種一般ノ技術ト研究ノ施設カ末ケ戰前兩國ノ域ニモ達セザル本邦現今ノ状態ニアリテハ宜シク速カニ此種ノ施設ヲ整備シテ工業動員實質ノ發展基礎ヲ確立ス可キナリ
現今時勢ノ進運ニ伴ヒ歐洲戰役ノ實跡ニ鑑ミ一般化學工業

ノ爲ノ國立研究所ヲ有スルニ係ハラズ其軍需ニ関スル者ハ
更ニ同種ノ機關ヲ有スルニ至レリ彼ノ英佛兩國ニ於ケル者
ハ勿論近年參戰セル彼ノ米國ノ如キハ軍事化學部ヲ特設シ
其佛國出征軍々司令部ニ五拾有餘名ヨリナル専門員ヨリナ
ル一隊ヲ派遣シ内地ニ於ケル軍事化學研究所ト協力事ニ徒
ヒツ、アリ蓋シ一般化學工業上ノ研究ト軍事上企圖スル田
的トガ其利害ニ於テ全然一致ヲ見得バカラザル者アルニヨ
ル而シテ我化學工業界ノ現狀ニ激シ軍需ノ目的ヲ以テ研究
ヲ要スル斯業ニ屬スル者ヲ擧ケレバ大約左ノ如シ

- (一) 火藥並ニ爆藥同戰時代用品ニ関スル研究
- (二) 航空飛行機化學的材料並ニ其代用材料ノ研究

二三

瓦斯。氣囊塗料。機材膠着劑。機翼塗料。同透明材等

(三) 自動車ノ化學的ニ関スル事項ノ研究

護膜代用品。燃料。油戰時代用品。減擠油代用品等

(四) 毒瓦斯燃燒液等ニ関スル研究

(五) 鞣皮及其代用材料ニ関スル研究

(六) 眼鏡用玻璃ノ研究

(七) 羊毛綿花纖維ノ代用品研究(附代用染料研究)

(八) 各種塗料。透氣防濕防錆用並ニ機材油脂類代用品ノ研究
以上列擧セル所ハ軍需化學工業中糧秣並ニ衛生材料ニ関ス
ル者ヲ除ケル主要ノ事項ニシテ此等ノ各項ハ根本的研究ノ
方針ニ據ルニ非ズンバ徹底的效果ヲ得ルニ由ナク而シテ工

業勤員ノ曉ニハ悉ク徹底的ノ解決ヲ望ムヤ切ナリ蓋シ此種
問題解決程度ノ遲速ハ工業勤員効果ノ遲速ニ與テカアルヲ
以テナリ而シテ此種研究問題要項ノ大半ハ若シ一般研究所
ニシテ進ブ此種ノ研究ニ從事セントスル者アレバ爲シ得ル
限リノ扶助ヲ與ヘテ之ヲ助長促進ス可キハ勿論ナリト雖此
現今我國新業ノ程度ハ猶未ダ過渡ノ時代ヲ脱セズ當面ノ製
造技術研究ニ專ニシテ能ク戰時代用品研究ノ餘裕ヲ有スル
ヤ否ヤ頗ル疑ナキ能ハザルナリ是レ茲ニ事項ヲ列挙シテ當
局参考ノ資ニ供セントスル所以ニシテ若シ此事實ニシテ爲ク一
種ノ杞憂ニ過ズトセバ邦家ノ爲慶賀ニ堪ザル所ナリ
然レ此前提記(一)(四)ノ三項ハ考クハ軍事ノ機密ニ屬スルカ爲ハ

二四

營利ノ目的ニ及スルノ故ヲ以テ此種軍用科學ニ着意セル各
國ハ其軍部ニ化學ノ一局若クハ一課ヲ特設シ此等ノ事項ハ
勿論而他ノ事項ト雖トモ必要ニ應シテ研究ニ從事セシメ或
ハ此等ノ研究統轄ニ從事シツツアリ之ヲ要スルニ此種特設
機関ノ軍事ニ必要ナルハ營ニ世民ノ輿論タルノミナラズ既
ニ其討論ノ時代ハ經過シ當ニ實行ノ時代ニ遷リツツアリ我
海軍ニ於ケル此種ノ施設ハ兵器ノ改良進歩ニ關シ技術本部
ノ設備アルニ關シテ更ニ科學的研究設備ヲ特設セルハ現今
本邦新業ノ趨勢ニ微シ實ニ機宜ニ適セル所置ト謂フ可シ苟
モ此種科學的ノ智識ヲ軍需化學工業ニ適應シ進取の徹底的
ノ舉ニ出ント欲セバ速カニ他種ノ工業ト分離經營シ又其研

完機関ヲ特設ス可キナリ
 化學工業製品ニシテ其軍需ニ屬スル者中工業動員ノ實施ト
 相俟テ之ト極要ノ關係ヲ有スル事項ノ研究ハ其專門分科毎
 ニ特種ノ人オト設備ヲ要シ從テ特種ノ施設ヲ要スルハ勿論
 ナリト雖トモ此等ニ関シテハ我部内當事者ノ之ニ鞅掌努力
 セラルル所アリ軍需ノ急ニ應シテ遺憾ナキヲ期シ得可ク茲
 ニ之ヲ云々スルヲ要セスト雖トモ此種研究機関中ニ屬スル
 我火藥爆藥ノ施設ニ関シテハ世界ノ斯界ニ比シテ著シク其
 規模ノ小ナルハ勿論現時本邦此種ノ他機関則チ我工業試驗
 所並ニ我海軍ノ施設ニ比較シ尙數等ノ遜色アルハ親シク此
 施設ヲ觀ル者ノ齊シク首肯スル所ニシテ精勵共職ニ努力セ

二五

ル所員ノ事ニ當ルアリト雖トモ徹底的ノ研究ヲ遂行シ根本
 的効果ヲ擧ゲンガ爲ニハ其編成ト設備トニ頗ル欲クル所ア
 リ爲ニ其平戰兩時ニ於ケル當局ノ期待ニ協ハサルナキヲ保
 シ難シ是レ短才淺學敢テ其任ニ非スト雖トモ以下數項ニ亘
 リテ其改善ニ関スル愚見ヲ陳セントスル所以ナリ
 我陸軍ニ於ケル火藥爆藥ノ工場ハ其規模ノ點ニ於テ之ヲ世
 及斯業ノ者ニ比スルニ所謂大規模工場ノ範圍ニ屬ス可キ者
 ニシテ其各工場毎ニ系統的一連ノ研究場ヲ有スルノ必要ア
 ルハ前第四編成ト經費トノ項ニ於テ説述セルガ如シ而シテ
 此全般ニ亘ル工業ガ又大規模企業ノ範圍ニ屬シ從テ完全ナ
 ル中央研究所ノ要アル亦前項ニ述ブルガ如シ而シテ此各製造

所ニ於ケル施設ハ此種人才ニ乏シキ今日暫クテ之ヲ論スルヲ止メ主トシテ中央研究所ニ於ケル者ニ就テ述ベントス而シテ前者ノ施設ハ大同小異ニシテ其規模ノ點ニ於テ大小ノ差異アルノミ又此種ノ施設ハ人才ト經費ヲ得ルノ程度ニ從ヒ多々益々辦ズルノ傾向ヲ有スト雖トモ左ニ列擧スル所ノ者ハ此種中央研究所ノ施設トシテ一般ノ體裁ヲ供ヘ得ル最少限度ノ者ヲ以テセリ

(其二) 研究人員ニ就テ

中央研究所ノ專任職員數左ノ如シ

所長 一人
 所員 九人
 技師 十七人
 二六

列任書記

職務分擔ノ大要左ノ如シ

三人

研究事項	人員	高等官	列任技師並書記
		專門分科別	
發射藥ニ關スル事項	一	(理科)實驗物理	八 少長研究員等 右ニ場實驗場
	二	(工科)大藥學	
砲內彈道及理學的研究事項	一	(全)應用化學	六 各二名
	二	(工科)大藥學	
爆藥並各種毒料ニ關スル事項	一	(工科)大藥學	一
	二	(全)應用化學	
起爆點大制並ニ其ニ關スル事項	一	(工科)大藥學	
大藥類(検査法並保存)ニ關スル事項	一	(理科)化學	
大藥爆藥物理化學的研究	一	(理科)化學	
機雷圖書報告圖書ノ整理	一	(武官)	
海外内地情勢調査	一		
其他業務	一		

區分	人員
研究員	八
製藥場	六
實驗場	二
分室	一
熱毒場	一
修理場	一
小器具	一
工廠	一
物理的研究	一
化學的研究	一
事務	一

此種研究ニ從事スルノ人士ハ其職務ノ種類ニ関シ又其努力ヲ要スルノ點ニ関シ故テ大學教授ト選任ナキノミナラズ其專科ノ技術ニ関シテハ之ニ勝ルモ劣ルナキ人才ヲラザルヲ得ズ此故ニ過スルニ前者同等以上ノ待遇ヲ以テ篤ク之ヲ彌フ可キハ至當ノ所置ニシテ此種研究機關ヲ重要視スル歐米各國ニ在テハ其長ハ勅任ノ待遇ヲ與フルハ勿論篤ク之ヲ過シ又研究員中特異ノ俊才ニハ此優遇ヲ與フルニ吝ナラズ之ヲ我工業試験所並ニ海軍此種機關ノ官制ニ徴スルモ我陸軍ニ於ケル此種機關ノ長タル者ハ其技術ニ應ジテ少ナクモ勅任ヲ以テ過ス可キハ勿論其研究員ト雖トモ超英卓逸ノ人才ヲ輩出セバ宜シク亦同等ノ待遇ヲ與フベシ蓋シ技術ノ才能

二七

ニ関シテハ優秀卓越ノ士ト雖トモ此種機關ノ長官トシテハ其資性ニ於テ往々充分ナラザル者アルニヨル
又此人員數ハ獨國此種研究所ノ者ニ比シテ半數以下ナルノミナラズ我海軍同種研究員ニ比スルモ亦少數ナリ而シテ我工業試験所ノ研究人員ト對比セバ其研究員タル高等官ノ數ハ實ニ三分ノ一タルニ過リガカリ

(其三)設備ト經費ニ就テ 現今我陸軍ニ於ケル火藥煤藥ニ関スル研究所ノ設備ハ前途ノ分拆實驗場ニ類スル二三ノ施設ヲ有スルノミニシテ而モ其設備ニ缺タルノ點鮮カラズ僅カニ不完全ナル試験所ノ實質ヲ備フルニ過ラズ此ヲ歐米ノ研究機關ニ比セバ霄壤ノ差アルハ勿論現時我國此種ノ施設

ニ比スルニ甚シク遜色ヲ有スルハ衆人ノ熟知スル所ニシテ
 爲ニ東京砲兵工廠ハ他ニ幾多施設ノ急ナルニ係ハラズ應急
 施設トシテ將ニ其改築ニ着手セラレントシツ、アルハ新業
 ニ從事スル者ノ等シク欣喜ニ堪ヘサル所ニシテ其工ヲ竣ル
 ノ曉ニハ前記分析實驗場トシテノ面目ヲ一新シ得マシト雖
 トモ尚此種工業技術ノ淵源タル科學研究場並ニ工業製造實
 驗場ヲ完成スルニ非ズンバ所謂研究所ナルノ實質ヲ缺ク者
 ニシテ其志實尙相伴ハサルヲ免レハ宜ク此種施設ノ缺ヲ補
 ヒ徹底的ノ効果ヲ得ルニ勤ム可ナリ

抑ニ此種研究所ノ施設ハ他ノ化學工業ニ於ケル者ト異ナリ
 其技術ハ比較的少ク理學的ノ扶ヲ要スルノミナラズ危害取

二八

締法令ノ示ス所ニ從ヒ特種ノ設備ヲ要シ且ノ廣キ地積ヲ要
 スルノ故ヲ以テ其ノ建設ニ比較的少額ノ費用ヲ要スルハ蓋
 シ已ヲ得ザル所ニシテ我陸軍此種ノ設備モ其創立以降茲ニ
 十有五年ノ久シク屢々其改善ノ議當局者間ニ上レルモ常ニ
 遷延或テ今日ニ至レルハ故ニ數米此種ノ施設キ數千萬ノ資
 本投シテ其ノ夢想ニ至キ極微スルヲ要セバト雖トモ施設ノ全
 部ヲ獨立シテ完備センガ爲ノニハ其當時尙數十萬ノ費額ヲ
 要セルヲ以テナリト聞ク蓋シ其當時ニ於ケル軍事施設ノ緩
 急上常ニ此議中止ノ狀態ニ陥シハ又已ヲ得ザリシニ因ルナ
 ル可シト雖トモ現今歐米斯界ノ技術ト相對峙シテ遜色ナキ
 ノ實ヲ擧ゲンガ爲最小限度ニ於ケル施設ヲ行フハ今日ノ状

更訂

態ニ於テ益々其緊要ノ度ヲ増加シ來レルハ吾ノ齊シク認ム
ル所ナリ而シテ今此種ノ設備ヲ完成セントセバ現時本邦斯
業ノ新營研究機關ニ徴シ時代ノ雅移ト共ニ往年ニ比シ勢ヒ
多額ノ費用ヲ投ズルヲ要ス可ク蓋シ其建設ニ要スル經費ハ
約百万ヲ要ス可シ然レトモ此種ノ設備ヲ有セズ此等特種人
才ノ養成ヲ行ハズ加フルニ徹底的研究結果ヲ有セザラシカ
他日工業動員ノ曉ニ於テ始メテ其必要ヲ認ムルモ亦此ヲ如
何トモスル能ハザルナリ蓋シ此種ノ設備ハ費用ノ許スアレ
バ比較的速カニ之ヲ得ベシト雖トモ此種卓越ノ人才ハ此種施
設ノ下ニ一定歳月ノ鍛練ヲ經ルニ非ザルヨリハ得ベカラズ
シテ如何ニ巨額ノ費ヲ一時ニ投カルニ遠カニ此種ノ人才ヲ得

ニ九

ベカラザルヲ以テナリ而カモ一旦緩急ノ時期ニ際シテハ如何
ニ此種人才ノ考數ヲ要スルカハ歐洲戰役當初ノ實例ニ徴シ
テ明ナリ彼ノ平時比較的此種ノ設備ニ乏シキ我聯合諸國カ
其學識ノ點ニ於テ比較的有爲ノ人才ニ富メルニ係ラズ其軍
需供給上一時困難ノ状態ニ陥リシハ吾人ニ良キ實訓ヲ與フル
者ニシテ現時此種特異ノ人才ハ勿論博學有識ノ士モ亦敢テ考
カラザル本邦ノ現状ニ徴シ此種設備ノ完成ハ日ニ遂テ益々
其急ヲ告ケツ、アルハ況ク我カ斯般ノ認ムル所ニシテ一般化
學工業界ハ勿論我海軍亦此種實行ノ域ニ進展シツ、アリ宜
シク我陸軍亦此種ノ施設ヲ完備シ必要ノ研究經費ヲ投ジテ
一日ニ速カニ此種研究ノ實行ニ着手シ他日ノ變ニ備フルハ

往

又目下ノ急務タル可シ

要スルニ歐州戰局ノ發展ニ伴ヒ我軍國ノ施設ニ関シテハ幾
 多ノ急ヲ安ス可キ者アル可シト雖トモ時勢ノ變遷ニ伴ヒ彼
 ノ他國ノ後塵ヲ拝シ僅カニ一時ヲ糊塗セル往時ト異ナル所
 ナリ現今四圍ノ情勢ニ徹シ特ニ戰器主働ノ需品ナル我此種
 研究機關ヲシテ單ニ經費ヲ要スルノ所以ヲ以テ尙旧態ヲ以
 テ満足シ莫如悠々タルヲ許スヤ否ヤ其平時此種工業ノ發展
 ニ關シテハ勿論他日兵馬惶惶ノ際亦々遺憾ナキヲ期スルノ
 點ニ於テ類ル憂懼ニ堪ヘザル者ナリ是レ短才淺慮共吞ニア
 ラスト雖トモ敢テ思見ヲ開陳シ部内有識ノ士ノ高教ヲ仰
 ガントスル所以ナリ

三〇

附言

獨國中央科學(火藥)研究所ノ施設ト本邦海軍ニ

於ケル科學及火藥研究施設並ニ農商務省試驗所ニ於ケ

ル化學工業試驗所施設ハ此種施設參考資料トシテ此末

尾ニ附スル事トセリ

附

録

369

裏
面
白
紙

第一 獨國「イバベルスベルヒ」

中央科學技術研究所施設一般

Die Centralstelle für Wissenschaftlich-Technische Untersuchungen (Neustadtberg)

(其一) 中央研究所ノ由來及歴史ノ大要

化學工業ノ發展ヲ期セシカ爲ニハ其種類ヲ異ニスルニ從ヒ
各々科學技術研究所設置ノ必要アルハ獨國上下輿論ノ是認
スル所ニシテ政府ハ其施設ヲ益々擴張スルノミナラズ民間
斯業工業又競フテ此種ノ施設ヲ完備シ科學ノ智識ヲ系統的
秩序的研究ノ下ニ之ヲ實地ニ適應シ其效果ヲ徹底的ニ收ム
ルニ勤メツ、アリ

一

而シテ同國火藥、爆藥、彈藥ニ關スル工業亦其施設ニ關シテハ
各々該種研究設備ヲ有スルニ係ラス更ニ同國極密商事議員
「フアンゲム、ランホー、ズル」(Geheimen Kommerzienrat Max von Dittenhofer)
氏主唱ノ下ニ我朝治三十二年此種工業ニ屬スル十一大企業
合同ノ下ニ基金ニ百十萬馬克ヲ有スル一技術學會ヲ組織シ
其本部ヲ柏林ニ置キ又此研究機關ヲ首府近郊「イバベルス
ベルヒ」(Neustadtberg) 附近「グイ」(Gule)ニ設置シ名付ケテ中
央科學技術研究所ト云ヒ此研究所ニ關スル經費ノ全部ハ各
會社ノ負擔トセリ元來此「グイ」ハ柏林市民ノ夏季住宅地ト
トシテ世ニ知ラレシ所ニシテ此研究所設立ノ當時ニアリテ
ハ僅ニ此住宅ノ一群ヲ改築シテ研究ノ用ニ充當セルニ止マリ

シガ此種研究ノ事項カ單ニ民間營利事業ニ関スルノミナラ
ス也テ一國々防上ニ大關係ヲ有シ且ツ其研究力幾多ノ困難
ヲ排除スルノ點ニ於テ敢テ国立科學研究所ト其程度ヲ異ニ
セサルノ故ヲ以テ前記學會ト政府當局者ト合同審議ノ結果
更ニ巨額ノ費ヲ投ジテ現今ノ施設ヲ完備スルニ至レリ是レ
實ニ我明治三十二年ノ秋ニシテ爾後明治三十五年ニ至リ莫
工業實驗場ヲ完備セリ而シテ此研究所ノ長官ハ柏林帝國大
學教授ウヰル博士 (Prof. Dr. Wied) ニシテ嘗テ陸軍研究所長ト
シテ長ク斯道ニ貢獻セル有爲ノ人材ナリ又此下ニ「ドレステ
ン」工學大學機械技術科教授ストリベツク博士 (Prof. Dr. Striebeck)
其職ヲ辭シテ専心業務ヲ扶クルアリ更ニ同所評議員トシテ

同國知名ノ商事議員豫備役高級武官並ニ大會社ノ重職等十
數名カ其經營上ニ執掌スルアリ爲シ得ル限り其研究ノ効果
ヲ徹底的ニ收ムルニ努カス

(其 三) 中央研究所施設一般

此研究所ニ其創立ノ始ノニ當リテ「ケーニツヒス」ニテハ
ウゼン (Königsruher Kammern) ニ火藥製造所並ニ同發射場ヲ有セ
ルニ近年ニ至リ之ヲ獨立セシメタリ
研究所ノ編成ニ就テ 左ノニ部ニ大別ス

(一) 理化學研究部

(二) 理學冶金研究部

理化學研究部ハ火藥爆藥ニ關スル科學的一般ノ事項ヲ根本

的ニ攻究シ創意的新案ヲ實地ニ適應セシメ又ハ一部ノ改良
的新案ヲ徹底的ニ研究ス
理學冶金研究部ハ火藥爆藥ノ檢壓材料器具並ニ藥莖ニ関ス
ル根本的ノ研究ニ從事ス
以上ノ研究ニ從事スル人員尤ノ如シ

- 初任待遇科學者(專任) 二人
- 化學者(兼任程度) 十三人
- 技術者(同 右) 十人
- 事務員(同 右) 四人

計 二十九人

外ニ判任程度並ニ職工等ノ補助員七十名ヲ屬ス

設備ニ就テ 研究所ノ位置ハ首府柏林ヨリ鐵道ノ便ニヨル
トキハ隨時ニ三十乃至四十五分間ニシテノイバベルスベル
止停車場ニ達シ得ヘク更ニ徒歩ニ十分間行程ノ位置ニア
ルカ故ニ首府トハ僅カニ約一時間ヲ以テ交通シ得ヘク從テ各
種専門分科ノ學會並ニ其學府ト連絡ヲ維持スルノ點ニ於テ
至大ノ便宜ヲ有シ此種研究所位置トシテ頗ル良好ナリ
地積ハ全研究部建物ノ爲メ

ハ〇〇〇〇 平方米(約二四〇〇〇坪)
ヲ有シ更ニ危害豫防ト後來發展トヲ企圖シテ其周圍ニ
三〇〇〇〇〇 平方米(約九〇〇〇〇坪)
ノ森林地帯ヲ租借ス

理化學並ニ理學冶金兩研究部ニハ各々科學研究實驗場並ニ
 各々工業實驗場ヲ附屬シ更ニ分析實驗場ヲ此兩科學研究實
 驗場ト合シテ建設ス而シテ此科學研究並ニ分析實驗場ノ設
 備ハ一般大學研究室ト大同小異ニシテ季節寒暑ノ如何ヲ問
 ハス其溫度ノ變化ニ大差ナキ如ク各室温水暖房裝置ヲ有ス
 ルハ勿論日夜ノ別ナク隨時研究ニ從事シ得ルガ爲メ完全ナ
 ル照明設備ヲ行ヒ加フルニ火藥類ニ關スル特別危害豫防法
 ヲ充分ニシ不慮ノ危険除外ニ勤メツ、アリ
 工業實驗場ノ設備ハ工業的ニ施行シ得ル最少限度ニ應ズル
 設備ヲ行ヒ爲シ得ル限り少量ノ材料ヲ以テ研究ヲ施行シ其
 經費ヲ節約シ得可カラシム而シテ火藥爆藥ニ關スル者ト理

四

學冶金ニ關スル者トハ各々相異ナリタル地域ニ建設シ火
 藥爆藥類ノ試製並ニ火藥爆藥ノ檢査材料及藥炭地金ノ製造
 ハ勿論此等ノ檢査ヲ完全ニ行ヒ研究ヲシテ工業的ニ徹底セ
 シムルノ各種裝置ヲ設ク

(附言)

此等設備細部ノ一般ハ明治四十四年小官駐在報
 告ニ付參照アラシコトヲ希望ス

第二 本邦海軍ニ於ケル研究施設一般

本邦海軍ニ於ケル軍用技術ノ進歩發展ニ関シ農商務省工業
試験場ノ施設並ニ從來其軍部々内ニ技術本部ノ設アルニ係
ラズ本邦現時ノ状態ニ鑑ミ更ニ該技術研究部ヲ新設シ又ハ
將ニ増設セントシツ、アリ而シテ軍機密ニ屬スルガ故ニ其
詳細ニ亘リ之ヲ知ルヲ得スト虽聞知セル所ヲ綜合シテ茲ニ
参考ノ資ニ供セントス

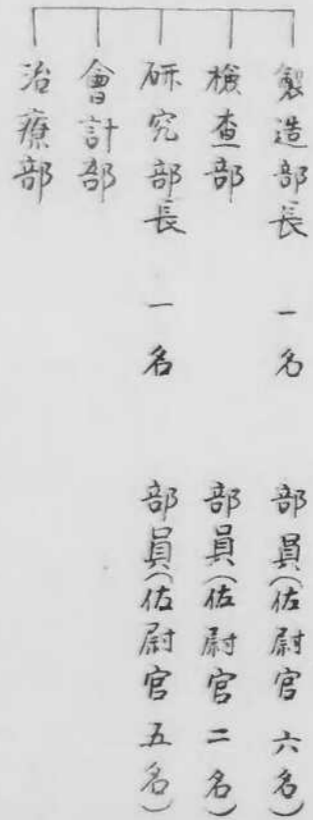
(其 二) 中央科學研究機關 ハ之ヲ築地海軍造兵廠内ニ置
キ所謂各種専門分科ノ高級研究員ヲ集メ兵器ニ關スル特種
ノ研究部ヲ新設セリ而シテ其研究室ハ左來ノ建造物ヲ改築
シ更ニ其一部ヲ新設シ本年度ニ於テ十數萬圓ヲ投ジテ研究
ニ着手ス其人員左ノ如シト

研究部長	將 官	一名
研究員	佐尉官	十七名

來年度ハ更ニ此設備擴張ニ意アリト聞ク

(其 三) 平塚ニ於ケル火藥煤藥製造並ニ研究部 ~~ハ~~平塚ニ
於ケル火藥廠ヲ該部ニ讓受後同製造所内ニ特設スルノ企圖
ヲ有スル者ニシテ其經費ハ初ノ四五十萬圓ナリシガ其後若
干ノ變更アリシヲ聞ク其詳細ヲ知ルニ由ナキヲ以テ暫ラテ
其初ノ者ヲ茲ニ記シテ參考ノ資トス又此高級研究員ノ數及
一般施設左ノ如シ

廠長(將官二)



而シテ此研究部ニ於テ施行セントスル業務ノ種類大要左ノ如シ

一 圖書館及研究事項並ニ火藥類ニ關スル諸規則編纂

ノ整理

二 一般分析

三 火藥爆藥ノ改良進歩ニ關スル事項及同原料ニ關スル

六

ル研究

四 物理化學ニ關スル研究

五 火藥爆藥理學的製品検査及之ニ關スル研究

六 貯藏ニ關スル諸研究

此種研究上必要ニ應ジ製造部員ヲシテ兼務セシム

(具 三) 彈道研究ニ關スル機關 吳吉浦ニアル火藥試驗

所ハ其研究員從來僅カニ高等官二名ト判任助手三名ニ過ギ
ズシテ其經常費年額八萬圓ヲ以テ研究ニ從事セシガ現時ノ
要求ヲ充スヲ得ズ之ヲ完全ニ擴張シテ根本的ニ其目的ヲ達
セントス其大要左ノ如シ

彈道研究所ノ編成

所長 一名
 研究員 高等官(文武官) 十名
 判任官 十二名

而シテ其職務ノ分科ヲ如シ

事務科ハ庶務會計作業成績ノ整理並ニ圖書室ノ事務ヲ掌ル
 彈道研究科ハ之ヲ

一 膽外彈道

二 膽内彈道

三 侵徹彈道

ノ三ニ區分シ各々基礎的並ニ其應用的諸事項ヲ分科ニ別テ
 テ徹底的ニ研究セシム。検査科ハ制定セラレタル火藥火工器具

七

検査並ニ此検査法ニ關スル諸事項ノ研究ニ從事ス
 貯藏取扱科ハ火藥火藥ノ貯藏取扱ニ關スル諸研究ニ從事ス
 物理並ニ化學科ハ前諸項研究間惹起スル問題ニシテ各其專
 問分科ニ屬スル者ヲ研究ス

祭動科ニハ製罐修理木工電氣等ニ關スル附屬工場ヲ附シ研
 究ヲ補助ス。雇スルニ前記研究員中其中央科學研究所員ヲ
 除クモ當吳及平塚方面ヲ合セバ火藥火藥ノ研究ニ從事スル
 人員ハ

勅任官 二名
 委任官 十五名
 ニシテ前僅カニ高等官二名、定員ナリシ者ニ比スレハ霄壤



ノ差異アルヲ認ム

(注意)此種定員ニ関スル事項ハ同部ノ秘密ニ屬スル者ナルカ
故ニ此記述ニ関シテハ可然キ取扱アラニ事ヲ希望ス

第三 農商務省工業試験所施設一般

此試験所ノ從事スル事業ハ主トシテ化學工業ニ関スル者ニ
シテ其名ノ示ス如ク研究所ニ非ズシテ試験所ナルモ其施設
ノ内容ニ至リテハ必要上研究機關ノ一部ヲ供フルモノアリ
而シテ該研究所ハ東京ト大阪ニ設置セラレ東京ハ主トシテ
學理的事項ヲ又大阪ハ主トシテ工業的實地方面ヲ攻究セン
トスルノ意圖ヲ有ス

八

其 二 東京工業試験所 八 大正六年水害以降更ニ火災ノ厄
ニ遭遇シ目下移轉新設ノ計企中ニシテ其現時ニ於ケル編成
たノ如シ

長	第一部長	高等官技師	判任技手
官	第二部長	二名	七名
任	第三部長	七名	十二名
名	第四部長	一名	三名
	第五部長	二名	三名
		七名	五名

此各部ノ分擔事項也ノ如シ
第一部ハ一般分拆並ニ外部ヨリスル試験鑑定ノ依頼事項ニ
應ジ其分拆ニ從事ス

第二部ハ第三部以下ニ屬スル化學工業以外ノ同種化學工業ニ関スル事項ノ試験

第三部ハ窯業ニ関スル事項ノ試験ニ從事シ 特ニ陶磁器ニ関スル者ヲ取扱フ

第四部ハ染色業ニ関スル試験ニ從事ス
第五部ハ電氣化學工業ニ関スル試験ニ從事ス

經常費ハ年額約 二〇〇、〇〇〇圓
内俸給 六五、〇〇〇圓

試験事業費 一三五、〇〇〇圓

而シテ民間依頼者ヨリ更ニ試験費ヲ徴シ且ツ試料ハ提出セシム

八年度ニハ移轉新築ノ豫定ニシテ敷地約一五、〇〇〇坪ト大阪工業試験所ト同一程度ノ新營費請求ノ意圖アリト聞ク
(其 二) 大阪工業試験所 ハ從來府立工業試験場ヲ擴張シテ国立ニ改メツ、アル者ニシテ其編成大要ヲ如シ

所長一(初)					
小計	第三部	第二部	第一部	技術官	
				部別	年度別
一〇	二	二	六	技	大正七年
				師	大正八年
一九	四	九	六	技	大正七年
				師	大正八年
一四	一	二	一	技	大正七年
				師	大正八年
三〇	六	一三	一	手	大正八年

此各部ニ於テ從事スル試験事項ハ一般ニ工業的ニ行フ者

トシ大要左ノ如シ

第一部ハ民間ヨリスル一切ノ依頼分析鑑定事項

第二部ハ化學工業一般ニシテ現今主トシテ燐寸、石炭、鞣皮、膠、揮發油、イシキ、玻璃、電氣絶縁体等ニ關スル事項ナリト云フ

第三部ハ窯業、特ニ耐酸、耐火材料並ニ珪瑯質ニ關スル事項ノ試験調査ヲナス、敷地ハ從來一〇〇〇坪ニ過キナリシカ更

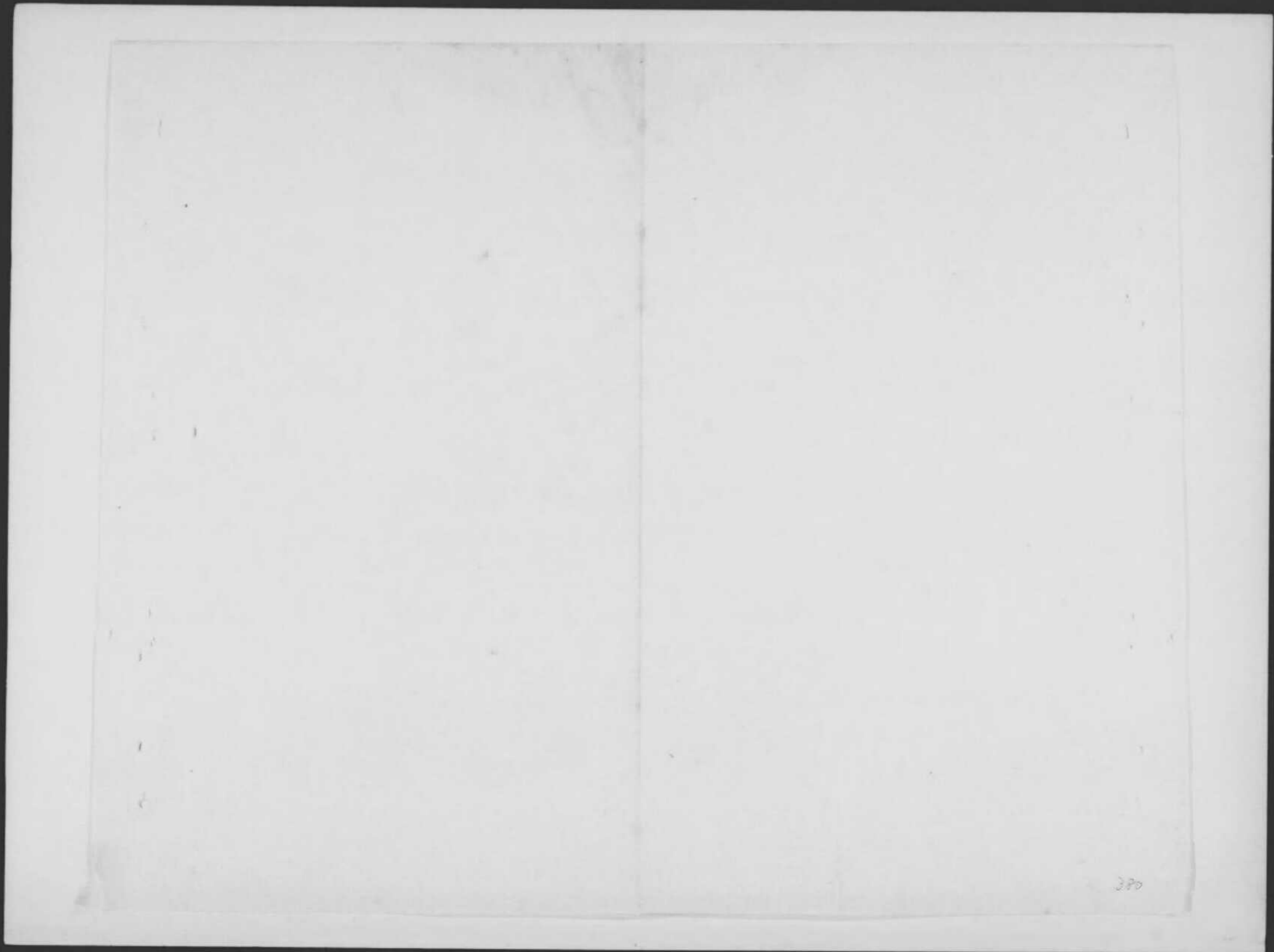
ニ一〇〇〇坪ヲ増加シ 一、〇〇〇坪トスル計画ナリ

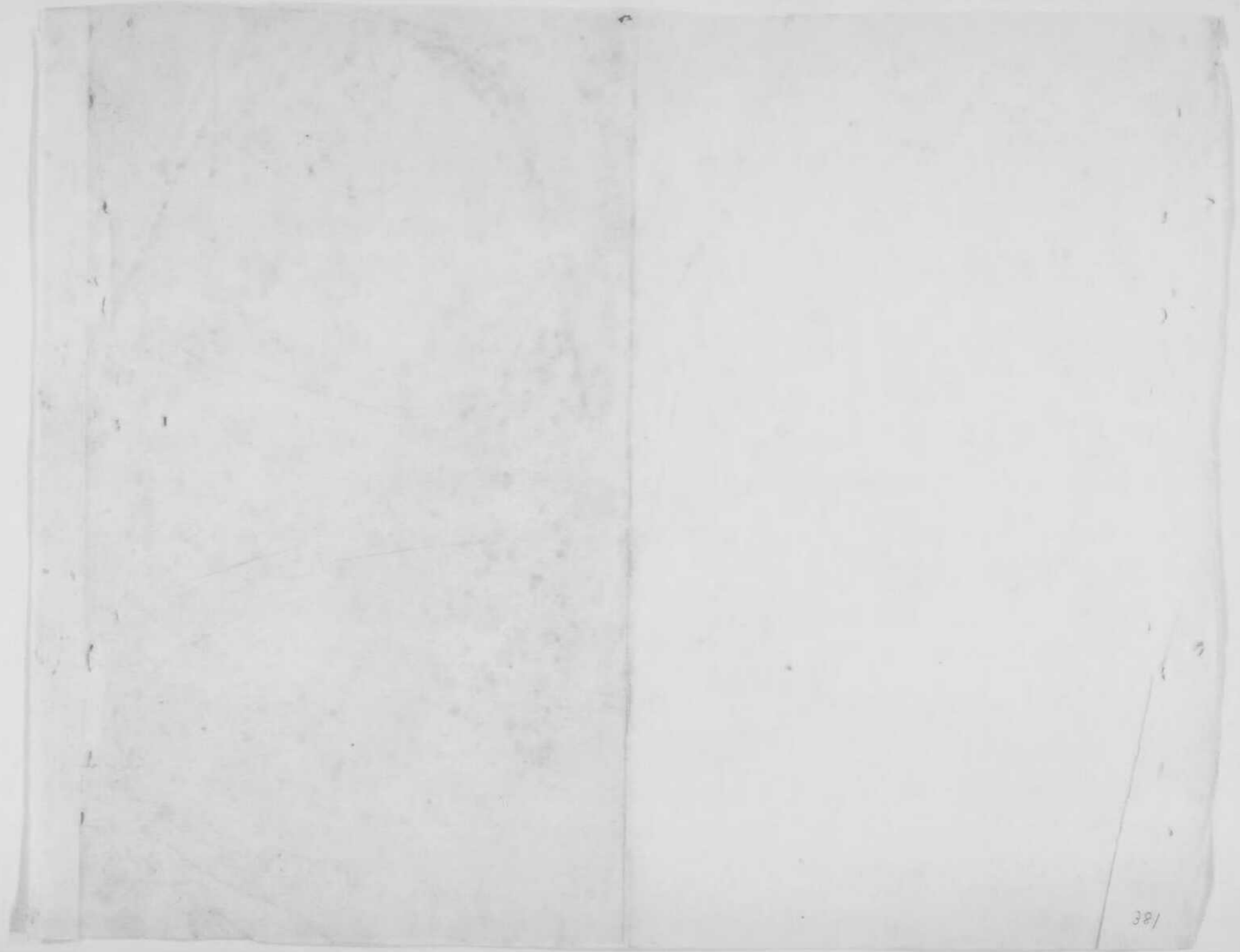
建造物ハ從來府立ノ當時ニ於テ六九六坪ナリシヲ更ニ二、一〇〇坪ヲ増シ、二七九六坪トスル豫定ナリト云フ

而シテ此等ノ施設ニ要スル費用ヲ示セバ
大要左ノ如シ

	府立當時ノ經費	建造物及附屬設備費	器械備品費
擴張費	六八・二六二円	一九七・四二円	
	二七〇・〇〇〇円	四三〇・〇〇〇円	
計	三三八・二六二円	六二七・四二円	

又此經常費ハ東京ニ於ケル者ト同一ニシテ完成ノ曉ニハ、
年額 二〇〇・〇〇〇圓ナリト云フ





381